

めてさへありや、又逢はれまいものでもない。これ、仕つけぬ旅に身を痛め、煩ひでも出りや悪い。何處を證據に尋ねうより、其の祖母様の方へ往んで居るとの、追つつけ父様や母様が逢ひにいてぢやほどに、悪いことは言はぬ、思ひ直して、是からすぐに國へ往んで、随分まとめて親達の尋ねて行かしゃるのを待つて居るのがよいぞや。」と、宥め賺すを聴き分けて、「あい／＼、忝うござります。お前が其のやうに言うて泣いて下さりますによつて、どうやら母様のやうに思はれて、わしや此處が往にとむない。どんな事なと致しませうほどに、申し、御家様、お前のお側に何時までも、わたしを置いて下さりませ。」「え、悲しいことを言ひ出して、また泣かすのかいの。先から、わしも子のやうに思うて、此處に置きたい、往なしとむないと、様々思ひ廻せども、此處に置いては、どうも爲にならぬことがあるによつて、それでつれなう往なすのぢやほどに、聴き分けて往んだがよいぞや。」と言ひつゝ、内へ、はり箱の、底を探して、豆板のまめなを悦ぶ餓別と、紙に包んで持つ

て出で、「これ、なんぼ一人旅でも、たんと錢さへありや泊める。僅かなれども志、この銀を路銀にして、早う國へ往にや。必ず必ずわづらうてばしたもんな。」と、銀を渡せば押戻し、「嬉しうござんすれど、銀は小判といふものを、たんと持つて居ります。そんなりやもう參じます。忝うござります。」と、泣く／＼立つを引留め、「それはさうでも、これはわしが志。」と無理に持たして壓打ちはらひ、「これ、もう往にやるか。名残が惜しい、別れとむない。これ今一度顔を。」と引寄せて、見れば見るほど胸迫り、離れがたなき憂き思。それと知らねど誠の血筋、名残惜しげに振りかへり、「何處をどうして尋ねたら、父様や母様に逢はれることぞ。逢はしてたべ、南無大悲の観音様。」「父母のめぐみも深き粉河寺、佛の誓頼もしきかな。」泣く／＼別れ行く跡を見送り伸び上り、「これ、今一度こち向いてたも。」折角ながの海山越え、艱難して、あこがれ尋ぬるいとし子に、不思議と逢ひは逢ひながら、名のらていなす母が氣は、どのやうにあらうと思ふ。狂氣半分、半分は死ん

て居るわいの。まだ生先のある子をば、親ゆゑ路頭に立たすかと、そのまま其處にどうと伏し、消え入るばかり歎きしが、起きなほつて涙を抑へ、「いや〜、どう思ひ諦めても、今別れては又逢ふことはならぬ身の上、たとへ難儀がかゝらばかゝれ、又その時はその思案。程は行くまい、追ひついて連れて戻らう。さうぢや、さうぢや。」と、子に迷ふ道は親子の別れ道、跡を慕うて尋ね行く。

(近松半二)

母を故國に省みて

汽車が故郷の停車場へ近づくにつれて、私の心は躍つた。思へば十五年の歲月、親しむ事の出来なかつた懐かしい山や、川や、森や、停車場前の湖や……私は幾たびか仰上り〜して、車窓から遙かに小さなプラットフォームへと眼を放つた。其所には數多くの出迎へ人に擁せられて、私の母もゐた。

母。この母あればこそ、私はかうして十六年ぶりに再び故國の土を踏んだのである。懐かしい母、世にも尊い母、自分を生み、育て、いつくしみ、今の位置に上せてくれた母——その母の顔を一眼見たさの單純な動機から、私はかうして歸つて來た。

福島縣耶麻郡翁島村——其所が私の生れ故郷である。祖先の墓のある土地であ

る。私の最初の、而して唯一の教育を受けた小學校の所在地である。或時は身の薄倅に泣き、或時は發奮の志を立て、幾たびか人知れぬ涙をしほつた故郷なのである。昔ながらの岡、森、湖水、それが今や、一種幻覺の中の光景のやうに、私の眼には異様に映じて来る。不思議とも、奇妙とも、名付けやうのない感想がひし／＼と身を襲つて来る。三十年前の自分の姿が全く別人のやうに浮んで消えた。「あゝ、おれはかういふ土地から出て行つたのかなあ。」

私は覺えずつぶやくのであつた。浦島の子が故郷へ戻つた時の驚異程ではなくとも、私は自分の眼、自分の耳をいぶかしまずにはをられなつた。

母はさすがに氣丈夫であつた。或日本の新聞では、私と母が相擁して泣いたと書いたさうだが、それは全く嘘であつた。泣くどころか、母は涙一滴眼に浮べなかつた。私は今更に母の剛膽に驚かされた。その氣象に勵まされた。「とてもこの世では會へないと思つた——。」

かう言つて、しかし母は飛立つばかりに喜んでをられた。村の歡待、若松市での醫會、市會、教育會、それから學校の方々の手厚い歡迎を受けた中にも、私は郷里に於ける恩人——小林榮、渡邊鼎兩氏の事は須臾も胸を離れなかつた。船が横濱に入つた時も、その方々はわざ／＼横濱まで出迎へに来て下さつた。甲板の上から、眼鏡でその恩人たちの顔を認めた時、歡びの血潮は私の全身に湧いたのであつた。

しかしながら、私が現在に至る種を蒔いてくれたのは、やはり母であつた。私が何物かを持つてゐるとするならば、その芽を枯らさずに、つちかひ養つてくれたのは、やはり母であつた。母は實に氣丈夫な勇氣のある人である。

私の生家は貧しかつた。小學校へ通つてゐる頃も、家に戻ると、すぐ私は母を助けて、種々の仕事を手傳つた。殊に私は稚い時分、ふとして過失で、手の指に火傷を負つた。指と指とが抱合してゐて、取分け、その點で學校朋輩にも嘲けら

れた。自分で言ふのはをかしいが、學校での成績は良かった。しかし、友だちの邪氣なき嘲笑は、身にしみくと辛く覺えた。

かゝる間も、母は深く私の身上を氣遣つてくれた。學校でも良い教師へ頼んで、何かと勉學の便宜をはかつてくれた。

小學校を出ると、私はすぐと猪苗代小學校の助教員になつた。俸給も月三圓かそこらであつた。家の生計も貧しかつたが、母は私の給料に手を著けるやうな事はなかつた。私は給料を丹念に貯へて、日本外史を買つて讀んだりした。その時は母も驚き、且共に喜んでくれたのを覺えてゐる。猪苗代の小學校長は即ち小林榮氏で、私は後々もこの人に取立てられたのである。

或日、私は若松にドクトル渡邊鼎氏の門を叩いた。いかにもして手指の切開を行つてもらはうとした。渡邊氏は私の手を診察すると、

「なあに、手術さへすればすぐ治るよ。」

と言はれた。この一語、私は天の福音として聞いた。而も手術の結果は果して良好で、従來は物もつかむ事が出来なかつたのが、りつばに役立つやうになつた。私は歡喜にふるへた。希望の光明は瞬間に私の胸を明るくした。

「よし、おれも一つ醫者になつて見せる。」

私は身ぶるひしてつぶやくのであつた。その時、私は十六歳であつた。

それから私は渡邊氏の藥局生として、夜の目も寝ずに醫學の研究にかゝつた。傍ら語學の勉強を始めて、英、佛、獨の各國語を殆ど獨學で習得した。かやうにして私は渡邊氏に二箇年身を寄せてゐた。この間の渡邊氏の親切、小林氏の指導を忘れる事は出来ない。

私が愈、東京へ出る決心をうち明けた時は、小林校長も、渡邊ドクトルも、翁島の母親も、心から賛成してくれた。渡邊氏は知人血脇氏に宛て、紹介狀を認めてくれた。同級生の誰彼も寄附金を募つてくれた。小林氏も身に不相應な餞別を

祝つてくれた。

かくて私は故郷の山河を後にして、明治二十九年四月、始めて花咲く都の土を踏んだ。血脇氏は義侠に富んだ人で、渡邊氏の紹介状を懐にしたこの一介の田舎書生を、快く引受けて玄關番にしてくれた。爾後、私は血脇氏の指導の下に研究の歩を進めて、その年の十月には、前期の免状を得、翌年十一月には後期の試験に及第した。それが學術と實地と一度に及第したのであつた。續いて血脇氏の口添で順天堂醫院の助手となり、更に傳染病研究所へ入つたのは明治三十一年の五月であつた。翌年には海港檢疫官補として横濱檢疫所へ行つた。支那に渡つたのはその十一月で、八九箇月滞在して、愈、三十三年十二月、渡米の途に就いた。渡航費に就いても、血脇氏に一方ならぬ世話になつた。

廣い希望に満ちた世界。そのアメリカ大陸に渡つて、私はまづペンシルバニヤ大學へ行つた。其所の圖書館に入つて、二三箇月を一心不亂に讀書した。やがて

一つの論文を書いて見た。それが端なくも大學教授たちの認むるところとなつて、同大學の病理學教室の助手となる事が出來た。偶、ロックフェラー研究所長フレキシナー博士の肝煎で、蛇毒の研究を以てカーネギー研究所に入り、英、獨、佛三國を経て歸米後、三十七年愈、ロックフェラー研究所に入所し、七人しかないメンバーの一人に推された。爾後今日まで其所の仕事に従ひ、自分の研究を續けてゐるのである。

世間の人はよく言ふ。

「野口は海外に渡つてから、非常に苦心をして、今日の位置と名譽とを得たのである。」

と。しかしながら、私は決して格段の苦心も努力もした覚えはない。私はたゞ楽しんで學んだのみで、今日あるを得たのである。

「あの時はさぞ苦しかつたらう。」

「さぞつらかつたらう。」

などと、よく人が言ふ。成程著る物がなくて、人の集る席へも出られなかつた事がある。食ふに困つた事もある。しかし私は心から「つらい」と思つた事はない。何時も自分の位置と境遇とに於ける正當の仕事をして來た。

「今度こそ最後のどんづまりだ。」

と觀念しかける時に、何時も義侠な人が現れたり、または境遇がひらけたりして、行手に榮ある光明を望む事が出來たのである。

世間を見ると、自分の位置に適應するやうにと働く人がある。待遇が悪いからと言つて、最善を盡さぬ者がある。しかし、私はそれと反對だ、番頭なら番頭としての自分の職責を果すべく、官吏なら官吏として自己の良心にやましからぬ勤勞をなすべく、學生ならば學生としての本務をあくまでも盡さねばならない。これ等は我が日本の學生諸君が、くれぐれも今から心がけて置かねばならぬところ

であらう。(野口英世)

孝養の心ふかく至れる者は、聲なきに聴き、形なきに視て、意にさきだち、志をうくと、禮の教に見えたり。親の心にささせる事、いまだ聲にも形にも顯はれぬさきに、之を視聴く様にさとり得て、其の意にさきだちてかなへ、其の志をうけて行ふ。

中村 楊齋

妹千代に與ふ（安政六年四月十三日）

此の間は御文下され、観音さまの御せん米、三日のうち精進にいたゞき候様との御事、御深切の御志感じ入り申候。精進・潔齋などは随分心の堅まり候ものにて宜しき事と存候に付、拙者も二月廿五日より三月晦日まで、少々志の候へば、酒肴ども一向食べ申さず、その間一度靈神様御祭のもの頂戴致し候ばかりに御座候。まして三日の精進はさまでむづかしき事にも之なく、御深切の事に候へば、相果し度存候へども、當所にてはあたりまへの精進の外に、又精進と申候うては、連中又は番人ども、何故かと怪しみ尋ね候に付、それをそれと相答へ候事、面倒に存候故、八日は幸ひ精進日なれば、その日一日に頂き申候。

抑、観音信仰せよとの事は定めて禍をよけ候爲にあるべく、是には大きに論ある

事に候へば、委細申し進ずべく候。（中略）法華經第二十五の卷、普門品と申す篇に、悉く観音力と申す事高大に陳べてこれあり候。大意は観音を念じ候へば、繩目に懸り候へば忽ちぶつぶつと繩が切れ、人屋へ捕はれ候へば忽ち錠・鍵がはづれ、首の座へ直り候へば忽ち刀がちんじに折れるなど申してこれあり候。是は、拙者江戸の人屋にて、この經は幾度も繰返し讀みて見候へども、始終この趣に候。それ故、凡人は是よりあり難き事はないとて信仰するも無理はなく候。

さりながら佛の教は奇妙な仕懸にて、大乘・小乗と二つに分ちて、小乗は下根の人への教、大乘は上根の人への教と定めこれあり候。小乗にて申候へば、観音は右の經文の通りのものと心得たものに信仰さする事に御座候。是は人に信を起さする爲なり。信を起さするとは、一心にあり難い事じやとのみ思ひ込み、餘念他慮なき事にて一心不亂と申すもこの事なり。人は一心不亂になりさへすれば、何事に臨み候ても、ちつとも頓著はなく、繩目も人屋も首の座も平氣になれ候か

ら、世の中に、如何に難題苦患の候ても、それに退轉して、不忠・不孝・無禮・無道等仕る氣遣はない。されど初から凡夫に、一心不亂じやの、不退轉じやのと申し聞かせても、さつぱり耳に入らぬもの故に、かりに觀音様をこしらへて、人の信を起させ候教に御座候。これを方便とも申候。(中略)

扱又大乘と申し候時は、出世法と申す事が肝要に御座候。出世と申候ても、立身出世など申す事には御座なく候。その初めは釋迦が天竺王の若殿に候ひし處、若き時から感の強き人にて、老人を見ては吾が身も往くさきは老人にならうかと悲しみ、死人を見ては吾が身も往くさきは死なうかと悲しみ、蟲けらの死んだの、草木の枯れたのまでに悲みを起し、是非に生老病死が此の世の習ならば、この世を出ねばすまぬと志を立て候て、年二十五の時、位を棄てて山へ入り、右の生老病死を免がれる修行をしに參られ候。さ候て三十出山とて、僅か五年の間に生老病死を免がれる事を悟り、生れもせねば老いもせず、病みも死にもせぬ事を悟つ

て出て来て、それから世の人を教化せられた。是が出世法じや。故に出世せねば濟世が出来ぬと申すもこの事なり。濟世といふは、即ち此の世の人を濟度する事に御座候。さてその死なぬと申すは、近く申さば、釋迦の、孔子のと申す御方々は、今日まで生きて御座る故、人が尊みもすれば有難がりもする。恐れもする。果して死なぬではないか。死なぬ人なれば、繩目も人屋も首の座も、前に申す觀音經のとほりではござらぬか。楠木正成公じやの、大石良雄じやのと申す人々は、刃物に身を失はれ候へども、今以て生きてござる。すなはち刀のちんじに折れた證據でござる。

扱又「禍福繩の如し。」といふ事を御悟りあるが宜しく候。禍は福の種、福は禍の種に候。人間萬事塞翁が馬に御座候。拙者など、人屋にて死に候へば、禍のやうなものに候へども、また一方には學問も出來、己の爲、人の爲、後の世へも残り、かつく死なぬ人々の仲間入りも出來候へば、福この上もない事に候。人

屋を出て候へば、また如何なる禍の來ようやら知れ申さず候。勿論その禍の中には、また福も交り候へども、所詮一生の間難儀さへすれば、先の福があるなり。何の效驗もない事に、観音へ頼みて福を求むるやうの事は必ず無益に存候。

尤も右の通りに申候へば、身勝手な申分、不孝な申分とも御存じがあらう。こゝに又論がある。易の道は満盈と申す事を大に嫌ふなり。御互に七人兄弟中に、拙者は罪人、芳は天札、敏は啞子、ぶざまの悪いやうなものなれど、又あと四人は何れもかなり世を渡られ、特に兄様・そもじ・小田村は兩人づつも子供があれば、不足は申されぬ。世の中の六七人も兄弟のある家を見較べよ。これ程にも參らぬ家が多いもの。近くはそもじの家にて、高須などにて、兄弟の内にはぶざまの悪い人も随分あるもの。然れば父母兄弟の代りに、拙者・芳・敏の三人が禍をかるう(負う)たと御思ひ候へば、父母様の御心も濟める譯では御座らぬか。

かつ杉は随分多福の家なれば、拙者の身の上よりは、却つて杉が氣遣ひなものじゃないか。拙者身の上は、前に申す通り、つめが牢死、牢死しても死なぬ仲間なれば、後世の福は随分あるが、杉は今では御父子とも御役にて何も不足のない中なれば、子供等がいつもこのやうなものと思ひて、昔山宅にて父様母様の晝夜御苦勞なされた事を話して聞かせても、眞とは思はぬ程なれば、この先、五十年七十年の事を、とくと手を組んで案じて見やれ。氣遣ひなものではないか。

去年も端午の客の多いのに、人はめでたしめでたしと嬉し顔すれど、拙者はどうも先の先が氣遣ひでたまらんから、始終稽古場へ屈んで、人の知らぬ處では獨り落涙した程の事であつた。若しや、萬一小太郎でも父祖に似ぬやうな事があつたら、杉の家も危い危い。父母様の御苦勞を知つて居るもの、兄弟にてもそもじまでじゃ。小田村でさへ、山宅の事はよくは覺えまい。まして久坂などは尙以ての事。されば拙者の氣遣ひに觀音様を念ずるよりは、兄弟甥姪の間へ「樂が苦の種、福は禍の本。」と申す事を、とくと申して聞かせる方が肝要じゃ。

そして又一つ、拙者不孝ながら孝に當る事がある。兄弟の内に一人でもぶざまの悪い人があると、あとの兄弟も自然と心が和いて、孝行でもするやうになる。兄弟も睦まじくなるものじゃ。それで是からは拙者は、兄弟の代りに此の世の禍を受合ふから、兄弟中は拙者の代りに、父母へ孝行してくれるがよい。左様あればつゞまるところ、兄弟中皆よくなりて、果ては父母様の御仕合せ、また子供が見習ひ候へば、子孫の爲是程めでたき事はないではないか。よくよく御勤辨候て、小田村・久坂なんどへも此の文御見せ、佛法信仰はよい事じゃが、佛法に迷はぬやうに、心學本なりと、折々御見候へかし。心學本に、

長閑さよねがひなき身の神まうて

神へ願ふよりは身で行ふがよろしく候。(十三日したゝむ)

(吉田松陰
書翰ニ依ル)

大田垣蓮月

太田垣蓮月の前半生は誠に悲惨なものであつた。蓮月自身がその履歷を書いた物に、

「父は因幡の國の人、大田垣光古みつひこと言へり。故ありて都東山に住む。その頃出生、名を誠のぶとよぶ。母は早う亡くなりて、父にはぐゝまれて人となる。三十餘りにて夫つまも子もなくなりて、

常ならぬ世をうきものと三つぐりのひとりのこりてものをこそ思へやがて父のもとにありて、四十餘りにおかれて、

たらちねの親のこひしきあまりには墓にねをのみなきくらしつゝ、この近き所に居らばやと思へど、山の上にて人の住むべき所にもあらねば、泣

くく神樂岡さきに移りぬ。もとより貧しき身にてせんかたなく、土もて急須といふ物を作る。いとてづゝにて、形ふつゝかなり。ゑりたる歌も、唯すきに詠むとはすれど、昔よりいとまなくいやしき身にて、よき大人おとなによりてまなぶ事をせざりければ、人の口眞似にて、片言のみなり。

手すさびのはかなき物をもちいでてうるまのいちに立つぞわびしき」とあるのによると、幼くて母に別れ、長じて夫をもち子をもまうけたが、その夫にも子にも三十餘歳の頃先立たれ、父と二人ぎりのわびしい暮しを續けてゐた。しかし、それも僅か十年程の短い間で、父にも死なれてしまひ、全くの孤獨な貧生活に陥り、其所で始めて生涯の大轉機に立つ事になつたと言ふのである。

蓮月は最初自分の最も得意とした碁の師匠をしようかと思つた。しかし、それは多くは男相手の事であるのでやめた。次に和歌の師匠を志した。しかし、それもやはり多くは男性を相手としなければならぬ事なのでやめて、最後に或人の勸

めるまゝに陶器を作り、それをひさぐ事によつて、細々ながら活計を立てて行かうと決心したのであると言はれてゐる。

それにしても、漸く四十を出たばかりの尼僧姿の才色すぐれた女性が、手づから雅趣ある陶器を作つて賣る店を出し、しかもその陶器には特色のある美しい文字で、才氣の溢れた和歌が書かれたり、彫られたりしてゐるのであるから、どうして世人の注意を引かないでおかう。かくして蓮月の歌が評判になり、蓮月の書が評判になり、蓮月焼の名が高くなつた。

一切を佛の前に捧げて、ひたすら布施にのみよつて、自己を生かして行くといふ佛者の生活には、無論尊さがある。しかし、蓮月の様に魂は佛に捧げながらも、なほ且自己を生かす爲に俗人の營を續けて行つた生活にも、私たちは稀有な尊さを認めずにはゐられない。蓮月が佛門に入つたのは、決して衆生の濟度が目的ではなかつた。かの女は唯かの女一人の救の爲にのみ佛にすがつたのである。衆生

の濟度を目的としたり、救世の大願を抱いたりする様な心持は、寸毫も蓮月にはなかつた。さうした大それた願や、さうした思ひあがつた心は、塵程も蓮月にはなかつた。終始一貫かの女の求めた所のものは、唯自分一人の「救はれ」であつた。この謙虚さ、つゝまじやかさは、私たちをして、一層蓮月その人を懐かしく思はせるのである。

しかも蓮月の日常生活は、一衣一鉢の雲水生活のその様に、簡素至極なものであつたらしい。随つて當時もてはやされた蓮月の物質的収入をもつてしては、餘つて／＼困つた程であつたに相違ない。蓮月はそれ等の一切を喜捨した。貧しい人々の爲に、または世の爲になる様々な事業の爲に、蓮月はすべてを投出して、毫も顧みなかつた。蓮月が生涯に行つた慈善事業や公共事業は、巨萬の富を擁する人々といへども遠く及ばぬ所であつたといふ。しかも蓮月自身に取つては、それは大した事ではなかつたであらう。寧ろ物を持つてゐる事の方が、かの女には

堪へられない煩であつたであらう。随つて他を救ふ事よりも、自らをして常に無一物の境涯に置く事の方が、寧ろかの女に取つては先に立つ求めてあつたであらう。そして其所に限りない豊かさがあり、無上の安らかさがあつたであらう。

様々な外的及び内的變遷を経て、蓮月が上述のやうな生活に徹底する事が出来た頃は、國史上空前の大動亂の起りつゝあつた時代であり、しかもかの女の住んでゐた京都が、何と言つてもその大旋風の中心であつた。

勤王佐幕何れもの勇士たちが、續々として京都に集つて來た當時の有様は、書物の上で讀んだだけでも、今日なほ血湧き肉躍る感がある。ましてその渦中に住んでゐたその當時の都人の心持は、それこそ文字通りに戦々競々であつたに相違ない。

世の中騒がしかりける頃

夢の世と思ひすつれど胸に手をおきてねし夜のこゝちこそすれ

と蓮月は歌つてゐるが、いかにもそれは實感であつた事と思はれる。なほ

伏見よりあなたにて、人あまたうたれたりと、人の語るを聞きて

きくまゝに袖こそぬるれ路のべにさらすかばねは誰が子なるなん

かういふ歌もある。

さうした中にあつて、次の様な蓮月の逸話が語り傳へられてゐる。それは、かの明治戊辰の役のをり、有栖川熾仁親王を征討總督官に戴き、西郷隆盛を總參謀とした官軍が、堂々として京都を繰出した時の事であつた。

三條大橋詰にそれを見物してゐた群集の中から、突如として一人の老尼僧が總參謀西郷隆盛の馬前に立現れ、悠揚とした態度で、「これを。」と言つて、一葉の短冊を差出した。そして西郷の傍にゐた一人の兵士がそれを受取つて、西郷に渡すの見届けるや否や、その老尼僧は再び群集の中へ紛れこんでしまつた。

その老尼僧が即ち蓮月で、短冊には次の様な歌が書かれてあつた。

うつ人もうたるゝ人も心せよおなじ御國の御民ならずや

感激性に富んだ西郷隆盛は、この一首の歌にすっかり感じ入つてしまつた。そしてそのをりの西郷の感激が、後日に於ける山岡鐵舟や勝海舟との折衝に、深甚な影響を與へたといふ事である。蓮月その人の見識の高さと、その同胞愛の博さとは全く驚歎に値する。

しかし、かうした高い見地から、またかうした博大な同胞愛をもつて、時勢の推移に深く心を寄せてゐたにも拘らず、蓮月は當時或種の人々から、徒に勤皇黨にのみ身方する者と見られ、その爲に佐幕黨の一味から、怖るべき迫害をさへも蒙らうとした事があると傳へられてゐる。尤も蓮月の交つてゐた人々の中には、梅田雲濱とか、梁川星巖とか言つたやうな勤皇の志士が少くなかつたから、蓮月が世間からさう見られるのも無理はなかつた。しかし、蓮月の本當の心持が、さうした差別境を超越した博い同胞愛に基づいたものであつた事は疑を容れない。

また、それであつたればこそ、あの様な我が國の歴史上空前の大變動期とも言ふべき時代に、しかも、その中心地であつた都に住みながらも、なほ且あの様な静かな、清い心をもつて生活する事が出来たのである。

この時勢に對して無關心どころか、寧ろ積極的な關心をもちながらも、しかも、あのやうな稀有な清閑な生涯を送る事が出来た所に、私は蓮月の本當の偉さがあるのだと思ふ。それであればこそ、當時動亂の渦中にあつた人々にさへも、蓮月の庵は有難くも尊い魂の休息所として懐かしまれ、慕はれたのであらう。其所にあの時代に於ける蓮月といふ一個の人物の存在の最大價值と意義とがあつた。蓮月の讚美者は、徒にかの女を女丈夫あつかひのみしないで、何よりも先づ、この一點に著目しなくてはならぬのではなからうか。(相馬御風)

奥村五百子

「半襟一かけを節約せよ。」と、東京九段坂下の街頭で叫んだ一女性があつた。この叫は、やがて百數十萬人の日本女性の大團結を作る第一聲となり、今日の愛國婦人會が生れたのである。九州唐津高德寺の娘奥村五百子こそ、實にこの生みの母である。

五百子は物騒な明治維新の際に、父了寛の爲、編笠に朱鞘の大小、義經袴に草鞋穿といふ男装で、長州の志士高杉晋作の許へ使した事もあつた。また筑前の女傑野村望東尼や、西郷吉之助とも、國事を談じた事があつた。二十二歳で同藩同宗の僧に嫁いだが死別れ、後水戸藩士鯉淵某と結婚して子まで擧げ、賃仕事などして一家を支へてゐたが、感ずる所があり、斷髮して夫と別れ、國事に奔走する

やうになつた。

國會開設最初の選舉運動に参加して、壯士の白刃を尻目に、候補者天野爲之の危急を救つた事もあれば、郷土の爲、鐵道敷設や、開港貿易に奔走した事もあつた。日清戦争後は五百子一流の植民政策を斷行し、朝鮮光州に日本村を建設して實業學校を建てた。蠶業教師、劍客、大工、左官、洗濯婆さんなどを百名から移住させて、土地開拓と農事の改良とを圖つた。この間様々な艱難に遭遇したが、少しも撓まず、貧困と迫害と戦ひ續けた。

明治三十三年南支那を視察し、一旦歸朝したが、義和團事件が勃發したので、東本願寺の慰問使と共に支那に赴き、天津、北京の間に苦難の旅を續けて、親しく日本の兵士を慰問した。丘の上で「日本萬歳——」と叫んだ女の化物を見たといふ噂が兵士の間に傳はつたのは、一行が北京に到着した夕方の事であつた。この時の兵士の辛勞を見聞して、「女性は家の留守ばかりではない、國家の爲出征した兵士の留守も臺所も守らねばならぬ。」と決意したのであつた。

「半襟一かけを節約して醜金せよ。」といふ叫は、全國の女性總動員の共鳴を得て、遂に愛國婦人會の結成となり、出征兵の家族の爲、傷病兵の爲、戦歿兵士の爲、濫い扶助の手を加へる様になつた。五百子の半襟一かけ演説は、全國の津々浦々に及んだ。

日露戦争に際會して、愛國婦人會は愈々盛大になり、活動は益々目覺しくなつた。五百子は袴を穿き、草鞋を穿いて、滿洲の野に同胞を慰問し、戦死者の靈を弔つた。旅順の二百三高地では、前から引かれ、後から押されて頂上を究め、墓標の前で讀經回向した。

滿洲各地を巡回慰問してゐるうち、持病の胃腸病が再發して、やつと東京に歸つたが、歸るや否や、病を推して、九段偕行社で巡回慰問報告會を開き、火のやうな辯舌で一座を感動させた。

明治三十九年十一月、病氣の爲、愛國婦人會本部から隠退する事になり、宮殿下台臨のもとに盛大な送別會が開かれた。五百子は近衛篤磨公から戴いた緋色の地に金糸の菊模様のうちかけ、白羽二重の袷、錦の袋に入れた短剣を帯して列席した。その席上、一生の思出にと、謠曲船辨慶の一節を謠ひつゝ、日の丸の扇をかざして一さし舞つた。

明治四十年二月七日、京都帝國大學附屬病院で死去したが、臨終まで口のうちに念佛を唱へ續けて、片手を胸に合掌の形をしてゐた。

五百子は一面極めて男性的であつたが、君國の爲、思想界の爲、軍人遺族の爲、孝子節婦の爲には、何時も涙もろい女性としての半面をもつてゐた。

東京九段坂下愛國婦人會の廣場に立つ切髪被布姿のかの女の銅像は、年と共に榮え行く生みの子愛國婦人會の成長を、表し得ぬ微笑を含んで、何時までも、何時までも、見守り續けて行くであらう。(小野賢一郎)

佐藤 つる

佐藤つるは岡山縣後月郡出部村の人なり。幼くして父をうしなひければ、母・姉と共に世を送りけり。素より貧しき家なれば、母は二人の女を育てんとて、人に備はれなどして、辛うじて年月を経にしが、憂苦のあまり遂に精神の病に罹りぬ。姉なる子は愚かにて物の理を辨へず。つるは時にわづかに七歳なりしが、姉を勵ましつゝ、共に母の病をいたはりけり。されど生計の道を得る事難く、一家殆ど餓に迫るばかりなりき。たま／＼憐みて糧を與ふるものあれば、つるは喜びて之を受け、先づ母に捧げ、次に姉に進め、なほ餘あれば自ら餓を支へけり。

後に母の病や、癒えて、姉は近村の人に嫁ぎければ、今はつる一人して母を養ひ、人の畑を借りて耕し、朝は夙に出て行き、夜は暁く歸り、風をも雨をも厭は

ず、男子に劣らず働きけるが、畑に出たる時も、時々小走りして家に歸り、母の顔色を伺ひけり。天氣暖かなる日などは、前のふごに母を乗せ、後のに鋤・鍬の類を載せて、弱き肩に擔ひもて行き、母をば田の畔或は樹の蔭に憩はせ、己れ其の傍に鍬を執りて、母の心を慰めけり。

つるは平生、龜衣・惡食にあまんじ、蓬髮に櫛をだに著けざれども、母の好むものは、なにくれとなく求めて得させけり。母、年いたく老いて、夜、眠にえ就かぬを、つるは枕邊に侍り、或は背を撫て、或は肩を揉みなどして、母の眠るを待ち、さて、細き燈のもとに絲を紡ぎ小車を繰りて、夜ふくるまで働きぬ。

或人其の孤獨を憐みて、「夫を迎へよ。」など勧めしに、つるの云へるやう、「他人を我が家に入れなば、母の心安かるまじ、母のいまさん間は、獨身にてあるこそよけれ。唯貧しき爲に心に任せぬ事の多かるぞ恨めしき。」とて、涙に咽びしを、聞く人袖を濕しけり。事官に聞えて、明治十八年十一月、縣令より金若干を賜ひ

ければ、つるは大いに悦び、「是父母の恩なり。」とて、直ちに歸りて母に告げ、又親戚・隣里の人に向ひて、厚く恩を謝したりき。

明治二十三年六月、母の病重りて、頼少く見えければ、つるは憂に堪へかねて、十日餘は夜も睫を交へずして、一筋にいたはりけり。母いまはの際になり、つるを呼びて曰く、「汝かよわき身ながら、長き歲月の間家事を勤め、孝養遺る所なし。今より後、汝は自らの身を大切にし、又汝の姉をいつくしみてよ。」といふ。つるは、「仰にや及ぶべき、心に懸けさせ給ふな。」と答へしかば、母は眉を開き、ほゝゑみてぞ身まかりける。時に年七十八なりき。つる、母の屍に抱きつき、いたく悲しみ歎きて、人心地絶えぬるばかりなりき。

つるが日夜勤勞せし結果として、田圃二段までひらきて、收穫せしものは、衣食の料にあてて餘ありければ、それをば縣令の賜と合はせて、郵便局に預け置きしを、此の時取り出して葬式の料に充てけり。

さて、喪畢りたる後も、朝夕に香を焚き、火を點じ、果物を供へなど、母の生けりし時の如くにし、又姉によく事へて、母の遺言をばあだにせざりき。つるは、斯く孝行すぐれしのみならず、一家の主として、公令を守り、田租・雑税など、掟のまに／＼、人に先だちて納めけり。明治二十四年十二月、事、雲の上に聞えて、勅定の緑綬褒章を賜はり、善行を表彰せられたり。(井上 毅)

秋萩のうつろひて風人を吹く
 花は世のためしに咲くや一盛り
 高ぶらぬ氣をやぶ入りの土産かな

三浦 栲良
 捨 女
 多代 女

東西の武士道と婦人

西洋の武士道では、弱者を擁護するといふことが、重大な任務となつて居る。それ故、婦人に向つては特別な待遇をする。これは日耳曼民族の殊に女子を尊敬した風習と、基督の母マリヤを崇拜する信仰とが結合して起つたのである。今日の西洋の日常禮節には、その餘波がいくらか認められる。いはゆる女尊男卑といふ風に、東洋人の目に映ずるのは、其の慣習から出たことが多いからである。

日本の婦人は、武士に保護される弱者では無い。婦人自らが武士である。武士を崇拜する者ではなくして、自身が武士と同様の覺悟をもつて居るのである。かよわい婦人でも、心は男子と同じである。皇祖天照大神は、素盞鳴尊が天にのぼると聞召して、彼に黒き心きたなあるならば、弟なりとも許すまいと、男装して、弓矢を

携へ、一合戦する準備をなされた。神功皇后に至つては、自ら舟師を率ゐて三韓征伐の大業を成させられた。國初の婦人から、已にさうであつた。武人の族であつた巴や、板額の話を引きまでも無い。よし、實戦に臨まなくても、父や、夫や、子が戦陣に出で立つと、自分は固より討死同様の覺悟を極めて居る。細川忠興の夫人は、從容三兒を殺して、自分も自害して果てた。苟も敵に降つて身を完うするより、死んで其の名を潔うする心は、男子と同様である。二子を失つた瓜生保の母も、め、しい泣言は決して言はぬ。まだ三人の男子があつて、御奉公が出来ると喜んだ。日本の武士道を驚歎するものは、其の裏面に、武士的婦人の在つた事を知らなければならぬ。正成の妻は、其の子正行を誡めた母であつた事は記憶しなければならぬ。古來、幾多の武人の功名の光輝の陰には、名も傳はつて居らぬ女性の内助があつたのを知らねばならぬ。

西洋の昔話に、ワインスベルヒの開城の話がある。久しい間の包圍に疲れて、

愈、開城ときまつた時、城中の婦人から攻圍軍に向かつて、明日開城の際には、婦人が、各自肩の上で運べるものだけは許してくれよとの歎願があつた。何がさて、婦人を尊ぶ歐洲人の事として、一も二もなく其の請は許された。翌日續々城門から出て来る婦人を見ると、皆其の夫を背負つて居る。城主のウエルフ侯も、亦其の夫人に背負はれて出た。寄手の軍勢は、これはけしからぬ事と怒つても見たが、約束の事故、其の儘になつたといふことである。

此の話で、我が國と西洋との武士氣質に、大相違のある事が認められる。城中の婦人の機轉、攻圍軍の寛仁が、此の話の主眼として、西洋人の耳には面白く響くであらうが、城中の武士一同が、おめく、妻子の肩にすがつて、城を落ちるといふことは、我等日本人には、どうしても武士の所業とは受取れぬのである。城内の日本婦人は、落城と共に皆自刃して果てるのである。かういふ話に照らしても、彼我の武士道に甚だしい差異のあることが、はつきりと分ると思ふ。希臘の

スバルタ婦人などは、寧ろ日本の武士道的婦人に近かつた。(芳賀矢一)

銀も金も玉も何せむにまされる寶子にしかめやも

山上憶良

ひとの親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな

藤原兼輔

親思ふ心にまざる親心今日のおとづれ何とさくらむ

吉田松陰

感想 三 題

一

女の涙は美しい。それはつめたい客観の世界から離れて、極みない愛の泉よりしたゝり來る純情の一滴である。

併し多くの女子は、これを自己の遊戯として弄ばうとする。そして所謂「涙の征服」が、つひに「涙の陷穽」となることに心づかない。世に不良兒を救ひ上げた慈母の涙よりも、自己を偽つた技巧の涙が多いのは悲しいことである。

女子は涙そのものを卑しいものにしてはならぬ。むしろ、涙によつて象徴されるつゝましき純情の、男子よりも多分に恵まれてゐることを讚美せねばならぬ。

二

幼児が母の懷に抱かれて乳房を含んでゐるときは、すこしの恐怖をも感じない。すべてを託し切つて、何の不安をも感じないほど、母性愛のめぐみが遍満してゐるのである。

いだかれてあるとも知らずおろかにもわれ反抗す大いなる手に
しかも、多くの人々は何故に自ら悩み、自ら悲しむのであらう。救の光の中に我等もまた幼児の素純な心をもつて、安らかに生きたい念願を持つ。めぐみの中に凡べてを託し得るは、美しき信の世界である。

三

我々はせめて與へられた日々の糧の前に坐つた時だけでも、しみぐとした心をもつて、箸を取り上げたいと思ふ。一尾の魚に對してさへ、念佛して酬いられた親鸞上人の心持も、自ら窺はれる。

一椀の飯も、粒々みな法縁の辛勞からさげられたものであると思へば、合掌せずにはゐられない親しさ涙ぐましさを感じる。

我々は天の恵と、地の福と、人の働きとを讃仰しよう。恵を絶えず求めて已まぬのは、しをらしいことである。併し、常凡な現實の中にも、ゆたかな恵を見遁してゐるのは、さびしいことである。(九條武子)

九條武子の歌

元結のしまらぬ朝は日ひと日黒髪さへもそむくかと思ふ
ふるさとなにつけばたゞちにながめやる山みな今朝は霧こめてけり
千萬の寶はむなしたふときは親よりつづくたゞこの身のみ

家庭に於ける禮讓

私どもは自分自ら萬物の靈長と稱して誇つてゐるのでありますが、かやうに自稱する人類の中にも、非常に高尚な上品な人もあれば、また動物にも劣るやうな野卑な下品な人もあります。同じやうに文明の恩澤を受けながら軒を並べて住まつてゐる者の中にも、高い卑い、いろいろの相違があります。この相違を生じさせるものは一體何でありませうか。言ひ換へると、廣い意味に謂ふ人品の高下を定めるもの、どんな場合にも、自分の品位を保つと共に、他人に對する尊敬をも失はないやうな、眞の意味に於ける紳士・淑女の資格を作り上げる上に、最も大きな働をするものは何でありませうか。それは實に家庭に於ける禮讓であります。

法律は私どもに對して、かういふ事をしては他人を侮辱するとか、又は自分の義務を怠るとかいつて、そのやうな行爲に對して制裁を加へるものでありますが、併し、日常の行爲について一々具體的に善處の方法を教へるものではありません。さうして、それを教へてくれるのが禮讓で、禮讓は、朝起きるから夜眠るまで、私どもの經驗する總べての事に就いて、自分の人品を高め、他人の感情を和らげる道を教へてくれるものであります。英國の名高い政治家で且歴史家のエドモンド・バークといふ人は、「禮讓は法律よりも肝要だ。」と言つて居りますが、それは此の意味を申したのであります。

禮讓のない家庭に育つた子供は、必ず不作法なものであります。諺にも「氏より育ち。」と申しまして、世間には、氏は良くても家庭が良くないために、習、性となつて、禮讓の何たるかを理解しない下卑な人間となるものが澤山あります。私はこの點に於て、禮儀は空氣と比較することが出来ると思ひます。若し多人數集つて部屋の中に、窓を締め切つて長く入つて居れば、頭痛や眩暈めまいがして、遂に

は倒れるやうになりませう。また大きな都市の人込の中に住んでゐれば、身體が自然に衰弱して、遂には病氣に犯されるやうになります。これはその部屋に居り、その都市に住むものの始終吸つてゐる空氣が悪いからで、家庭の禮儀もこれと同じ影響を持つて居ります。そればかりでなく、禮儀のない家庭が濁つた空氣よりも一層恐ろしいのは、人間生存の第一義たる精神を腐敗墮落させて、すつかり人間を野蠻化させるからであります。家庭に於ける禮讓の有無乃至厚薄の感化は、實に驚くべく恐るべきもので、それが自然の間に間斷なく行はれるだけ、決定的に人間一生の運命を左右します。諺に「朱に交れば赤くなる。」といひますが、これは友を擇ぶ上に當嵌まるばかりでなく、更に適切に家庭の空氣について言はれる事でありませう。

凡そ、どのやうな法律でも、また道德上の教でも、家庭の禮儀を基礎として立つてゐないものはありません。それ故、家庭の禮儀が廢れると、どんなに立派な教を説いても、嚴重な法律を設けても、その効果は見るに足らぬものでありませう。それと反對に、若し家庭に於ける禮讓が立派に行はれてゐれば、別に高尚な教を説かず、嚴しい取締を設けなくても、自然に向上して、美風がおのづからその間に成立ちませう。

社會を一つの大きな機械に喩へてみますと、禮儀はちやうどその機械を圓滑に運轉させる油のやうなものでありますが、その禮儀の本、油の源流は、家庭生活の間に行はれる禮讓であります。たゞ「お早うございます。」とか「今晚は。」とかいふやうな簡単な言葉の中にも、人の心を和らげる非常な力が籠つてゐるではありませんか。世にこれほど骨折が少くて効果の多いものは、外にありますまい。さうして、ちよつとした物の言ひやう一つで、これほど人の感情を和らげることが出来れば、眞心からする禮讓の應接が、人の好感を得、社會の美風を成す基本となることは言ふまでもない事で、一家の主婦であり、また人の妻であり母であ

る者が、この點に就いて特に深く注意すべきは、更に言ふまでもない事でありま
す。

社會の基本は一家であります。社會の美風は一家の美風を擴大することによつ
て實現することが出來ませう。私ども現代の女性は更に一步を進めて、一家の美
風の源流は女子の心情にあるといふ信念の下に、自重努力して、禮讓の美風を家
庭に實現しようてはありませんか。(鳩山春子)

女子の經濟的任務

衣食住は言ふまでもなく、學問、藝術、事業、その他生活萬般の事、凡そ經濟
の基礎の上に營まれないものはない。それ故、經濟上の知識技能をもつと否とは、
生活の目的を達すると否との別れ目になるわけである。

經濟の仕事のうちで、女子は消費を掌ると言はれてゐる。それは女子が自分の
爲の消費ばかりしてゐるといふ事では、い。現在の社會では、生産と配給との主
要部を男子が占めて、女子はその補助者たる地位にをり、且また生活の基礎部で
あつて、最も眼に著き易い衣食住の消費經濟は、主として家庭に於ける女子の管
掌に屬するところから、さう言はれるのである。

經濟生活の目的は、物資を消費して人生の幸福を生出す事であるから、女子が

消費を掌るべきものである以上、その任務は甚だ重いと云はなければならぬ。またいかに財産、知識、才能があつても、健康でない限り、それを役立てて人生の目的を達する事の出来ないのは勿論であるから、その健康の維持増進、心身の發育成長の本になる衣食住が、主として女子の管掌に屬してゐるとすれば、この點から見ても、女子の経済的任務は極めて重いと云はなければならぬ。随つて消費經濟をいかに取りさばくかといふ事は、女子にとつては最も重大な問題の一つである。

費用のかゝらない事を「これは経済的でよい。」と言つたり、蓄財の上手な人を「あの人は経済がうまい。」と言つたりする例は世間によくある事である。しかし節約または蓄財と、經濟を上手に處理する事とは、無關係ではないが、決して同じ事ではない。經濟の處理を上手にするとは、原則の應用を精確にする事である。さうしてその經濟的方法的の原則は、最小の勞費を用ひて最大の効果を擧げる事である。

ある。

この原則に就いて注意すべき事は、最小の勞費と言つても、必要な勞力や費用をも出し惜しむ事ではない。また最大の効果と言つても、止めどなく財産を作る事ではない。すべて仕事をするのに用ひる勞費に對する効果の割合が、出来るだけ大きくなるやうにする事を言ふのである。

すべて活動の原則として、この最小勞費最大効果の原則の立てられる事は、おのづから具つてゐる人の心の要求なのである。それ故この原則は、自然吾々の意志の働くところに働いて、生活のあらゆる方面に、機械と技術との新發明、新工夫を絶えず促すのである。随つて、吾々は出来るだけ便利な機械と技術とを用ひて、生活を有効にするやう心掛けなければならぬ。

便利な機械、技術は出来るだけ利用したいものであるが、しかし、その本旨を忘れて、新しい機械や技術を用ひさへすればよい、用ひなければ何も出来ない

思ふのは間違である。馴れた事ほど勞費が少いといふ一面もあるから、永い間の經驗や習慣を輕々しく棄ててはならない。また人と場合との適不適によく注意しないと、卻つて損をする事がある。しかも完全な設備をしたり、精良な機械を買入れたり、新しい技術を習つたりする事は、誰でも必要に応じて十分に出来るわけのものではない。

凡そ生活上で最も價值のあるのは、誰にでも自由に出來て、且また變化極りない日常の瑣事に應用される事ではない。「塵積つて山となる。」といふ譬の通り、眞に經濟的效果を擧げるにも、眼に見えるところだけをりつぱにするよりは、眼に見えない事ごとに氣を附ける方が大切である。ところがさうした事は、特殊の機械や技術に依頼する事が出來ない。どうしても人間の頭と手とを働かせる外にない。またこれならば資本なしに、何時どこでも、誰にでも自在に應用する事が出来るものである。

新しい機械や技術よりも、實地の工夫が大切であるからとて、また日常の瑣事であるからとて、その時々のいゝ加減な思附でもよい事と思つてはならない。寧ろ小さい雜事ほど秩序のある、精確な處理が必要なのである。さもないと、生活の纏りがつかなくなつてしまふ。殊に消費經濟に於てさうである。

處理の精確を保つ爲には、實驗と計數との基礎、即ち科學的の基礎が必要である。科學的と言ふといかにもむづかしいやうであるが、近頃では吾々の心身の事も、食品、燃料、照明、衣服、その他の日常生活萬般の資料に就いても、それら専門の學者によつて精確な研究が行はれ、その結果が學校では勿論、雑誌、新聞、ラヂオ、講演會などで發表されるから、少しの努力さへ拂へば、格別の大騒ぎをしないで、大體間に合ふくらい知識を得る事は容易である。これ等の知識と舊い經驗とを照し合せ、それらの境遇に應じて生活を合理化する工夫を施せば、これまでも何でもない事のやうに思つて、習慣とその時々と思附とてかたづけられて來

た食事の準備や後始末の順序、拭き掃除、洗濯の方法、針一本の使ひ方、魚一切の買ひ方にも、案外浪費を省いて、能率を高める餘地のある事が見出されるであらう。

このやうにして日常生活を整理し、最小勞費最大効果の原則の實行に努める事によつて、消費經濟管掌者たる女子の任務が、始めて手落なく盡される。さうしてその結果は、獨り家庭の經濟生活を有効にして、幸福を獲得増大するばかりでなく、同時に社會に對して偉大な貢獻となるのである。(渡邊英一)

婦人の教養としての國文學

一

文學は人間の記録であるから、その中には人間生活に關する各般の知識がある、暗示がある、教訓がある、慰藉がある。文學は人間の偽らざる影像であるから、その中には人間の赤裸々なる相がある、人間性の眞實がある。随つてそれから來る反省、教訓のいろいろがある。

しかし、物にはすべてその利のあるところには弊があり、功には又罪が伴ふことが多い。文學の利と功とを見る人は、同時に、その弊と罪とを考へることが必要である。世には文學を愛好し、尊重するあまりに、その社會への、人間への惡影響を忘れてゐる人もあるが、かゝる人は文學を知らず、その弊害のみを見て、

一概にこれを輕蔑し、排斥しようとする人とともに、謬りたる人である。我々は愛好するものに溺れず、愛好せざるものを毛嫌ひせずして、公平な判断をあやまらぬやうにせねばならない。

文學には、小説・劇・日記文學・詩歌・いろ／＼な形態があるが、そのいづれの形態に屬するを問はず、人間に關し、人間生活に關して、多量の知識を含むものである。それで、これに接し、これを鑑賞することになれた人々は、不知不識の間に、それから多量の知識を得て、おのづから人生に關する理解を廣め、深めてゐる。文學は時代の反映であり、時代生活の寫眞であるが、一見我々自身の生活とはまるで無關係であるかの如く見える古典文學からさへ、我々は我々の靈を培ふべき尊い知識を得、又相をかへて現代の生活に新しく生かすべき知識を得ることが少くない。況んや現代の文學から得るものは實に豊富であるのである。人々には、それ／＼の特殊な職務・職掌・環境があるから、随つて我々の直接の經驗、見聞に

入り得べきものには限界がある。我々の書き物を通して得る知識は、直接に事物に接して得る知識を遙に凌駕してゐる。しかして、この書物の中、文學は主なるものの一であらねばならない。昔は小説のやうなものを、作り物語と稱して、人間空想の所産で、人生に必要な知識を與へない娛樂の方便物のやうに考へてみたが、かかる考の當否を論ずることは、今や恰も白晝に幽靈を持ちださうとするに等しい愚である。

現實に對する不満、理想に對する憧憬は、常に文學の内容を成す。さうして、文學はしば／＼明日の生活への設けとなるものである。文學の中には現代に於ける幾多の缺陷が指摘されてゐると共に、これらの缺陷に對する解決の暗示を與へるものが多くある。

結婚生活や、家庭生活や、社會生活を取扱つてゐる文學には、常にそれが指摘してゐる現代の缺陷に關して、知識を與へるものがあるばかりでなく、これらの

問題の解決に關し、これらの缺陷の改善策に關して、種々なる暗示を與へることも多いのである。さうして、文學の内容としては、單に作者が直觀に依つて得た感想に止るとしても、作家や詩人の優秀な直觀力から得られたこれらの斷片的な想が、時流の常識の上に高く位置するものであれば、時には學者の研究にヒントをあたへ、その思想體系をつくる動機ともなり得るのである。

文學には、人生の悲哀痛苦を示して、人生の重荷を一層感ぜしむるものである。けれども亦、文學の描き、語りて示してくれる世界には、崇高・醇美・悠久なる世界もある。所謂極樂淨土があり、神の國があり、理想の社會がある。詩人の錦心繡腸を通して見せられる自然や人生、作家の卓抜な想像力を通して覗かせられる人生は、光明と崇高と清淨と純潔との充ちたものである。

かゝる文學は、窮屈な拘束の充ちた社會の生活、苦痛の多い人生から、暫くの休養を得んとし、様々な娛樂を求め、慰藉を求めてゐる人々に、清い慰藉を與へ、高い理想を與へるものである。

以上述べた所のものを、人間としての情操の教養と纏めて見てもよい。さうすれば、「婦人」としての局限された方面はどうであらう。人間としての教養に、特に「婦人」としての限界を與へらるれば、一層「情操教養」の必要を感ずることが切である。婦人も人間である以上、人間教養の外に立つべき筈はないが、特に「婦人」といふことを考へる時には、結婚生活、家庭生活といふことが先だつが故に、男子に比して、一層豊かな情操の教養を積むの要を感ぜしめられる。潤なく、熱なき干乾びた婦人を重要な成員とした家庭は悲惨である。殊にそれが主婦であつた場合を想像すれば、寒心すべきものがある。婦人と雖も國家社會的教養は大切であるけれども、文化社會婦人の最も重要な活動は寧ろ家庭に在らう。舅姑の最も勝れた保護者であり、夫の最も良い伴侶であり、而して、子弟・雇人の最も優れた教育者であるべき主婦の教養としては、それにもましたものは家庭的の教養で

ある。さうして、家庭的教養としては家事・裁縫に止つてはならない。すべての家事の煩瑣な事柄の運用の基礎ともなり、又、あらゆる家庭人との間の油ともなるものは、教養された情操であらねばならない。高い、清い、明るい、暖い情操であらねばならない。この意味で、文學に依る情操の教養は「婦人として」の限界を附する場合に、特に強調さるべきである。

二

文學は人間生活の記録であり、人間の記録であるから、人間的教養に有益である事、上に述べた通りであるが、又、世界のあらゆる人間は、或民族なり、或國民なりであることなくしては、人間であり得ないから、文化國を飾つてゐる文學は、その國民性・國民精神の表現である。従つて、教養の立場から見れば、文學は國民教養の上にも亦有益なものといはねばならない。

日本民族であり、日本國民である我々は、日本民族・日本國民であることなし

には、人間であり得ない。苟も日本民族の血を傳へてゐるものであれば、日本的な生活を營み、日本的な環境に圍まれ、日本的な教育を受けてゐる。その一つでも持つものであれば、その生活に日本的な特徴を持つことを拒み得るものはあるまい。感じ、思ひ、行ふことの上に、日本人的な特徴なしには生きることは出來ないのである。かくして、國文學は如何なるものでも、人間記録であると共に、又、日本國民の感じ、思ひ、行ふたことの記録に外ならない。即ち、日本國民の生活記録である。

日本國民の生活記録であることを通して、人間生活の記録である所の國文學は、我々日本人の國民的教養、又、人間的教養上、最も貴重なるものの一つであるが、かく教養を二面に分けて考へるものの、究竟は一となるべきものである。日本人としての本質的なもの、日本精神の精髓は、決して世界に孤立したものではなく、あらゆる人間の上に擴充さるべき普遍性を持つものであるに相違ない。我々

は、外國文學に依つても人間的教養を得ることが出来るが、なほ我々の生命の糧としては、國文學の上に一層適切なものを持つてゐる。恰も我々が西洋流の肉食をなして生きて行けるが、それよりは永い傳統を有する日本流の魚菜食を改善して行く方が、一層我々の肉體の榮養に適してゐるとされるやうなものである。消化も易く、又身體の機構の或部に故障を來すやうなことなしに、榮養たる職能を十分になすことが出来る。簡明にいへば、容易に血や肉や骨などになることが出来るのである。

日本文學に表れた精神は、我々日本人の感じ、思ひ、また、これを行ふ上に容易であつて、また、自己の内外に故障を起すやうなことはないものであるといひ得る。即ち穩健な著實な精神の榮養たり得るものである。しかし、こゝに注意すべきは、同様な魚菜食でも、古今時代を異にするに従つて、その調理の上には色々の變遷のあつたやうに、形を變へ、調味料を變へて、これをその時代の人々に

適するやうに工夫することく、日本文學の精神も、古代のまゝに、これを我々の現代生活に取り容れることは適當でない。これを現代に新しく生すことが必要である。それで、傳統的教養には、常に現代的教養が車の兩輪の如く伴ふを要するのである。現代的教養のみに傾けば、根柢のない、輕浮な人間となる様に、又傳統的教養のみに傾けば、時代後れの固陋な人間となるのである。

我々は現代を知るには、色々な機會、色々な學問、色々な機關を持ち、又、實行上にも之を要求されてゐる。我々は現代に對する相當な理解なしには、一日でも生きて行けるものではない。併し、傳統的なものは、自然に残存してゐるものでも、この滔々たる世界的大波のなかに在つては、動、もすると、次第に遺亡されようとしてゐる。現に眠りかけてゐるものでも、よく考へれば、我々に取つて非常に必要なものもあるから、これらは、これを自覺的に呼び覺して、益、涵養して行くやうにせねばならぬ。これを呼び覺し、これを涵養する道は、唯これを

抽象し、説明するだけでは足るものではない。これに親しみ、これを會得して、自然に我が身に付けるといふ方法が伴なはなければならぬ。否、それを主としなければならぬ。これには、文學、藝術に勝るものはないのである。

上代文學に表れた「まこと」の精神、そのいろいろな現れにしても、これを萬葉の歌などで讀むとき、これに多大の愛著を感じ、憧憬をおぼえ、尊敬の念を持つて、自らなる精神の興奮を禁ずることは出来ない。かゝる精神は我々に取つて必要な精神であるばかりでなく、何處に押出しても立派な精神であることは、今更いふまでもない。「神にしませば」とか、「へにこそ死なめ」とかの歌にあらはれた忠の「まこと」は、永劫に失ふべからざる我々の寶であるばかりでなく、如何なる民族・國民でも仰ぐべきものである。

中古文學に表れた「物のあはれ」の精神も、そのまゝでは生活の相の非常に違つてゐる我々には不適當であるが、我々の全生活の中に、かゝる知情意の優しく調和した一面を持つことを誰が拒むだらう。猛きばかりが武夫でないと考えたやうに、かゝる優しい一面があつてこそ、日本精神は尊く、日本國民性は誇らしいのではあるまいか。

近古文學に表れた武士道精神は、相は異なつてゐるが、上古・中古の精神の内容を複雑にし、深くして、これを武士時代に適應せしめたものである。近世文學に表れた、義理を尊重する精神、人情に生きる精神も、亦これを現代に適用しても、よく我々の社會生活を圓滑にすべきものではあるまいか。法律や理窟に生きる傾向の甚だしい今日に於て、義理と人情の調和を目ざした、即ち、社會規範と人間愛とを協和させようとした生活は、これを排斥すべき理由は見出されぬ。

要するに、國文學の教養は、傳統的精神の涵養に重きを置かるべきであるが、國民的教養は、傳統的教養の外に、現代的教養を必要とするが爲に、それと調和を保たしめ、これを現代に生かす所に、その意義があるのである。(藤村作)

心のお化粧

最近、教養といふことが、いろんな方面で、眞面目に考へられるやうになつて来た。これは男女共に、本當の自分に目覺めつゝある現れとして、大變喜ばしいことである。

ところで、「結婚生活は眞の意味で教養の始まりである。」とは、詩聖ゲーテの言葉であるが、これは大體に於て間違つてゐないと思ふ。その意味で、婦人の教養（修養と云つてもよい）は、結婚生活への準備教育だと云つていゝわけである。私はそのつもりで、今日の女性は如何なる教養が大切であるかといふことを考へて見たいと思ふ。

教養とは、その人が、品性を高めるとか、知識を博めるとか、いづれも個人の問題であるが、婦人にとつては、彼女の全生涯を支配する結婚生活と密接な關係がある。教養のある女と、無い女とでは、結婚生活に入つてから、雲泥の相違がある。その點で、教養の問題は、男性よりも、女性にとつて、より大切なことだとも云へるのである。

ところが、實際はどうかと云ふに、必ずしも、さうだとばかりは云へない。これはある和尚さんの話であるが、ある檀家の父親がやつて来て、

「私の娘は女學校に行かれぬので、ひどく親を怨んで、お父さんは私といふものを勝手に生みながら、少しも教育しようとしなない。そんなら私にも考へがある。不良少女になつてやるからと喰つてかゝるのです。いつたい、どうしたものでせう。」

と、いかにも心配さうに、云つたといふのである。すると、和尚さんが、
「よいことを教へてあげませう。娘さんにかう云つておやりなさい。お前が云ふ

通り、私は勝手にお前を生んだのだから、お前に教育させようとさせまいと、それも私の勝手だ。」

と、云つてやつたといふのである。いかにも禪僧らしい教へ方で、甚だ痛快だが、このやうな不心得な娘が、世の中には、他にも澤山あることと思ふ。

教養とは女性にとつて、最も優れたお化粧のやうなものである。白粉や口紅の化粧は一夜にしてはげるが、教養といふ化粧は、一生はげない。日と共に、年と共に、いよ／＼匂ひ深く、薫り高くなつてくる。教養とは、また、一生あせぬ美しい花のやうなものである。

教養は、決して、人の爲めにするものではない。然し、人妻となり、やがて母となる女性にとつて、それがいかに大切であるかといふことは、くはしく述べる迄もない。ハイネといふ詩人は「美人は、景色のよい風景畫のやうなものである。一寸見はよいが、すぐに飽きてしまふ。そこへゆくと、教養の高い女は、間取り

のよい室だ。住めば住むほど、住み心地がよくなる。」

と言つてゐるが、これは至言だと思ふ。(菊地 寛)

花紅葉あだ比べして過ぐる世に街はぬ松ぞのどけかりける

千種有功

雨そ／＼軒の下石くぼみけりかたき業とも思ひすてめや

橋守部

物皆は新しきよしたゞ人は古りたるのみし宜しかるべし

よみ人しらす

婦人の愛

日本人は笑はない國民であるといふやうなことを、屢、耳にすることがあるが、しかし、日本人は決して笑はない國民ではない。電車の中などで、殊に若い女たちが笑つてゐるのは、毎日のやうに見出すことである。時としては、腹立たしいほど笑つてゐる女たちを見出すことがある。も少し控へ目であつて欲しい、も少し肅かであつて欲しい、と思ふことは随分ある。わたくしたちは、子供の頃、「男は三年に片頬」といふことを教へられたことがある。即ち三年に片頬だけ笑へといふことである。これは無論極端な話であるが、婦人といへども、人の面前で餘り人の感情を害ふやうな笑ひ方は謹んで欲しいと思ふ。尤も、無邪氣な少女たちの笑の如何に尊く懐かしいものであるかは、わたくしも知つてゐる。少女の

清淨な笑は、この世界の詩であり光である。わたくしが不快に思ふ笑は、饒舌や無智や野卑を暴露するやうな、不純な笑を意味してゐるのである。

かういふ點に於て、日本人は、殊に一部分の女たちは、餘りに笑ひ過ぎるとわたくしは思ふ。無駄な笑をする暇があるならば、わたくしたちは、もつと眞面目に考へて見なければならぬ、幾多の重大な人生問題を持つてゐる筈である。

米國の婦人は、新しい思想や文藝に對する趣味と理解力とに於て、男子より優れてゐるといふことである。繁雜な近代の都會生活は、男子を驅つて、殆ど物質的な生活にのみ走らせてゐる間に、婦人は室内に閉ぢこもつて、讀書し、靜觀する多くの機會を持つてゐるのである。このやうな境遇に置かれた婦人が、男子よりも秀でた新しい思想や、高尚な趣味を解するやうになるのは、必然のことである。將來我が國に於ても、婦人が國民の藝術・思想の主なる理解者であり、また創造者であるやうな時代が來ることであらうと思ふ。

メエテルリンクの言葉に、「唇がとざさるれば魂が眼ざめる。」といふやうな意味のものがあつたやうに記憶するが、わたくしたちの魂の眼をさますには、わたくしたちは、成るだけ口をとざしてゐなければならぬ。人の感情を害するやうな、不純な笑は排斥しなければならぬ。

婦人に共通な一つの大きな缺點は、徹底的でないといふことである。物の深い底の底まで徹し貫いて行かうとする氣魄のないことである。婦人は男性に幾倍して鋭い感受性を持つてゐる。けれども、その鋭い感受性を通じて感じ得たるものの眞底まで、貫いて苦しんで、考へて見ようといふ根氣を缺いてゐるやうに思はれる。

たとへば、婦人は物のあはれといふことに對して、恐らく男性以上に鋭い感じを持つてゐる。けれども、それはたゞ感傷的な、涙ぐましい感じに終つてしまふことが多くはないだらうか。物のあはれを通して、更にその底に、永遠を貫いて

流れる大自然の寂寞を直感するといふやうな、哲學的・思索的方面に於て、或は男性に比して、極めて微溫的な妥協的な點がありはしないか。

わたくしをして言はしむれば、日本人は笑ふことの代りに、も少し泣いて見なければならぬと思ふ。夜を通して泣いた人でなければ、朝の光の尊さが味ははれないやうに、眞實に人生を泣いたことのある人でなければ、人生の有りがた味は分らない。また人生の尊さも味ははれない筈である。

婦人の第一の美德は愛であるとは、誰しもいふことである。しかしながら、その愛ですら、その深さに於て、廣さに於て、婦人の愛は、男性の愛よりも、限られてゐるやうな場合が多い。

わたくしたちは、花の香にも比ぶべき自然のままの純一な愛の泉が、靈しくも婦人の魂から限りなく湧き出づることを知つてゐる。けれども同時に、婦人の美しい愛が、博い、深い、限りもない尊い愛とならないで、上滑りのした、技巧的

な愛に墮落してしまふことをも、餘りに多く見てゐる。

愛を措いて何處に人生があらう。殊に愛を忘れて何處に婦人の生活があらう。しかも從來、婦人の愛は主として一つの家庭といふやうな狭い世界に限られてゐた。しかしこの愛の心は、やがて人類全體をつゝみ、過去と現在と未來とを通ずる人間的な愛そのものの基調とならなければならぬ。愛がこのやうな博い深いものとなるためには、婦人自身がもつと思索的となり、内省的となり、宗教的・哲學的とならなければならぬ。

更にわたくしたちが婦人に對して感ずることは、極めて生一本な美しい婦人の愛の働き方である。本然的に溢れて來る婦人の愛の美しさは、どのやうに荒び果てた人の心をも、慈雨のやうに濕ほす力を持つてゐる。その力は燃えるやうに強い。しかしその缺點を言へば、盲目的になり易いことである。理性の判斷を忘れるといふことである。熱し易く、燃え易く、狂ひ易いといふことである。女の長

所でもあるが、しかし、その熱し易い、燃え易い愛の心を、何時も誤なき方向に向けて置くといふことが大切である。燃え易く、狂ひ易き愛の心は、やがて愛の本性を失つた偏頗・盲信といふやうなものに墮してしまふ恐がある。

無論、一步々々を打算的な考から進めて行くやうな所謂賢い女よりも、生一本な女らしい女の方が、どれほど女として尊いものであるかも知れぬが、しかし、たゞ美しいだの、浪漫的だのといふことと、立派な人間としての女といふこととの間には、大きなへだたりがある。人間としての女となるためには、婦人の愛に更に寛容といふものを加へなければならぬ。

婦人の愛は、一人の人を愛し貫くといふ點に於て、男より優れてゐるかも知れぬが、同時に一人の人を憎み貫くといふ執念さに於ても激しい。かういふ點に於て、わたくしたちは、殊に寛大な心、人の罪を許す心を持ちたいと思ふ。

キリストは、全世界を愛せよと言つた。佛陀の愛は、人類の上にも、草木の上

にも展げられてあつた。愛の廣さと愛の深さにつれて、わたくしたち自身の生
活が擴がり、わたくしたち自身の魂が伸びて行く。婦人自身の愛を廣くし、深く
することが、彼の女自身の魂を大きくし、深くすることである。(吉田絃二郎)

みどり子を見れば涙のかずそひてありしむかしぞいとこひしき

伊藤仁齋

子を思ふ心の道の心もて親に仕へよ世の中の人

松平定信

日本の女性

私の知つてゐる外國人の中に、一人の昆蟲學者がある。私とは違つた専門の世
界に住む人であるから、私はその人の學識を批評することが出来ないが、性質の
極めて坦懐な男であることを知つてゐる。この昆蟲學者は九月一日の午前十一時
前、横濱から一二里離れた海岸で、一人の年若い學生と一緒に洋袴フツボクシ下一つで貝殻
を拾つて居つた。所へ、例の地震で、續いて起つた大きな波の爲に、海岸に脱い
て置いた著物を攫さらはれて仕舞つた。彼はつれの學生と共に無事ではあつたが、洋
袴下一つで横濱へ歸らねばならなかつた。また其の時、この兩人は横濱が全滅し
てゐることを、どうして知ることが出来るか。平日であつたならば、胸も、もじや
くの巨大漢が素裸で歩くのであるから、確かにポンチに一好材料を提供したに

相違ない。しかし横濱への道筋に一杯出てゐる人は、いづれも一分間に倒れた家から、命からく、逃げ出した人だ。もとより素裸の西洋人を批評するやうな心の冷淡な人間でない。自分の苦しい間でも、外國人に同情し、外國人を尊敬する善良な日本人だ。素裸で歩く氣の毒な西洋人を見るに見かねて、一人の男が自分の著てゐたシャツを脱いで彼に與へたさうだ。彼の昆蟲學者は喜んでそのシャツを着てはみたが、體の小さい日本人のシャツであるから、彼の臍を隠すことが出来なかつた。沿道の避難者は彼に水を與へ、握り飯を與へ、相互に命拾ひした幸運を祝つた。彼が私に語つた言葉を用ひると、「日本へ來てから随分な年になるが、未だ嘗て此の時のやうに、單純で麗しい生命で輝いた日本人の顔を見たことがない。これまで日本人の感情は、私に取つて無關係のものであつた。また理解することが出来ないのであつた。然るに、この時初めて私は日本人、男より女に、一種莊嚴ともいふことが出来る喜ばしい顔のあることを發見した。陽氣と云ふ言葉を用

ひたなら誤解されるかもしれないが、極めて元氣な、いそ／＼と苦痛を平氣で背負つてのける勇敢な微笑の漂ひを發見した。私は白狀するが、これまで日本の女はさう美麗だとは思はなかつた。然し苦痛の場合に顯れる西洋の女の醜さを思ふと、日本の女がかういふ時にどんなに麗しく見えるかに駭かざるを得なかつた。實際、私を迎へてくれた沿道の女はチャフィルスマイル（陽氣な微笑）を持つてゐた。この時私がかういふ女の國に住むといふ事を喜び、出来るなら一生を日本國のために捧げたいとも決心した。……君笑つてはいけない。かういふ決心をした外國人に限つて、日本を間もなく去つて、日本を罵倒し始める奴だと君は例の皮肉をいふかも知れない。然し私は日本の女の美を初めて發見した。……どうか私をしてこの新發見の甘い酒に、しばらくの間でも酔はさしてもらひたい。」この昆蟲學者の言葉は眞實な告白であつた。私はこの言葉をどんなに喜んだであらう。澤山の外國人は神戸や長崎へ逃げたり、甚だしいのになると、上海までも逃げて自

分の安全を謀つたのに拘らず、私の友人のこの昆蟲學者は東京に踏み止まり、帝國ホテルの地下室で、汗みどろになつて、米國の救護班と共に力一杯骨を折つた。この事はいつぞやの新聞にも彼の寫眞入りで出て居つた。

私は今再び、所謂日本人の笑ひといふことを考へる。この日本人の笑ひ位、西洋の文學者に興味を唆る問題はあるまい。小泉八雲も餘程以前それを取扱つた文を書いてゐる。日本人は男でも女でも、西洋人に對して不可解な謎の笑ひを持つてゐて、この祕密は到底知る事が出来ないものと思はれてゐる。私の友人の昆蟲學者は、この人生最も悲惨な場合に、「喜ばしい笑ひ」を發見したのであるが、我々日本人の眼で見たならば、「喜ばしい笑ひ」と受取れないものであつたかも知れない。男でもさうであるが、日本の女の顔は概していふと、お能の面だ……。消極的で、決して無表情でないが、表情を噛み殺してゐる顔だ。泣くと笑ふとの間に立つてゐる顔だ。見やうに依つては怒つてゐるとも見えるし、又同情してゐる

とも思はれる顔だ。一言でいふと、原始的な顔だ。苦痛を樂に堪へ、喜怒哀樂を感激的に出さない所が、原始的基調を捨てない文明人の長所だともいふことが出来る。若しこの大慘事に當つて、私の友人が發見したやうに、「喜ばしい笑ひ」を顯してゐるとすると、それは日本の女が原始人でも文明人であり、文明人であつて原始的素質を捨てないからであらう。確かに日本の女は苦痛に堪へ得る。又感激的に喜怒哀樂を表現しない。否、表現する力を持たない。つまり、そこが日本の女の強みでなくて何であらう。日本の女が、その個性が西洋人のやうに、外面的に明瞭となつて来て、悲哀と笑ひとを全く違つた感情として取扱ふやうになり、言ひ換へると、平日は高い靴の踵を上げて舞踊し廻り、かういふ非常時に當つては、ぎやあぎやあ泣き叫ぶやうになつたとしたら、私は日本國民の將來を悲しむものであると云ひたい。小泉八雲は日本の偉大な點は日本の女にあると書いてゐるが、私もさうだと思はざるを得ない。言葉の上では消極・積極と分れては

あるが、実際では消極の方が、所謂積極以上に力強い場合が澤山ある。日本の女性の性質でも、一寸見ると、消極的な弱いもののやうに見えるが、いよくとなる、積極的に見える西洋の女より、遙かに強力な効果を顯すものであることが知れる。

私は今回の慘事で、日本の女の力に對し敬意を拂ふものである。私は全く日本の眞價を知つた。日本の女を見直した。(野口米次郎)

わが國の女性と海外發展

一

皇祖 天照大神は女性に在しまし、そのひろき愛、強く正しき御こゝろと、その清淨なる御姿こそは、實にわが日本女性の尊き久遠至高の象徴であらせらる。

大神が高天原から遙かに見渡し給うた國土は「空は青雲のたなびく涯まで、地は白雲の垂れ下る涯までに及び、大海は棹櫓を乾す暇もなく、船の通ふ涯まで貢物を積んだ船が滿ち續き、陸路は貢物の荷をつけた馬が岩の根、木の根を踏みわけて、馬の爪を立てたる限り、どこまでも立續いてゐる。」と祈年祭の祝詞に言ひあらはされてゐるが、この雄大なる思想こそは、實にわが古代日本人のおほらかな世界觀と旺盛なる發展的精神とを物語るものであらう。

従つて、神代から上古にわたるわが國民精神は、まことに濶達進取的で、女性の氣持も亦おほらかにして、貞淑優婉、しかも内に一種の雄々しさを持して、常に男子と力を協せて、國土の開拓とその文化の發展に盡して來たのであつた。この事はかしくも神代に於ける御物語を始めとし、神武天皇御建國の過程にあつてはいふまでもなく、更に降つては地方統治の爲め四道將軍の擧族移住と、その一族の地方に於ける分派繁榮、及び日本武尊の東方御經略に隨伴せられ、而かも崇高なる犠牲的精神を發揮せられた弟橘媛、或はまた先帝の志を繼がせられ、女性の御身を以て雄々しくも半島を鎮定せられた神功皇后等の御偉績にも、これを拜察することができるのである。

また奈良朝時代に、藤原清行の女喜娘が父の入唐に隨つて、雲山萬里、遙々唐の都長安（今の陝西省西安）に赴き、歸途は父と袂を分ち、非常な苦難に遭遇しつゝ、都に歸還したことのごとき、その歴史に傳へらるるところは極めて少いが、

又以て上古に於ける、わが女性が消極的ないはゆる籠り、がちなものではなく、おほらかな世界觀を有つてゐたことを實證するものであらう。

併し中世に及び鎖國的國策に轉じた爲め、國民は不知不識の間に、そのおほらかな世界觀を消磨したやうに見られるが、これは決して、大和民族が本質的にこの氣象を喪失したのではなく、彼の室町時代に支那沿岸から遠く南洋方面にまで、荒き波濤を乗切つて活躍した八幡船の勇士達や、また徳川時代に今の印度支那方面に活躍した山田長政乃至は、わが郷土の生んだ偉材角屋七郎兵衛等のごとき、何れもその時代の政策と相容れざる爲め、女性の活動がそれに伴はなかつたものと考へられる。

然るに明治維新に際し、明治天皇には畏くも五箇條の御誓文並に御宸翰によつて、「舊來の陋習を去り」、そして「萬里の波濤を拓開し國威を四方に宣布」すべき旨を御示しになつてゐる。これこそは、實にわが大和民族本來の雄大なる發展

的精神への復歸に外ならないので、顧みればわが國民が鎖國長夜の夢に耽つてゐた間に、世界の情勢は全く一變して了つた。げに、わが國は列強に比べ土地は甚だしく狭小にして、天然資源は、この新時代に處して國民を養ひ、更に世界文化の水準線に沿うて國威を發揚するに足らないのである。故にわが國民はわが民族本來の雄大なる世界觀に目覺め、海外に雄飛し、その物質的缺陷を補ふとともに、その養ふところを以て、更に世界に對して宏く詔し給へる八紘一字の御精神に基く、皇國文化の光被に力めねばならぬのである。

明治以來わが輝かしい國勢興隆の蔭には、幾多の尊い女性の貢獻がある。今やわが國は曠古の世界的大變革期に際會し、こゝに皇祖の詔示し給うた大理想顯現の第二の段階へと進まんとしてゐるのである。即ちそれは東亞諸民族と協同して、新しき東洋文化を建設し、世界文化への貢獻を爲さんとするものである。

かゝる秋に際して、わが國の女性たるもの、よく男子と力を戮せて、この大理

想の遂行に當らねばならぬ。

二

それにつけても吾々は、彼の日露戰役の前後に互つて、雄々しくも滿目荒寥胡沙吹きすさぶ蒙古に使し、喀喇沁王府に在つて親しく王及び王族子供の教育等に、獻身的に働かれた河原操子及び鳥居きみ子兩女史の名を忘れることはできない。

草枕涯しも知らず三人して蒙古が奥に出でたゝんかも

たそがる、沙漠のはてに星飛びて行くてはるけし今日のやどりは

茜さす入日の空に乗り駒の影消えて行く天地のきは

草を分けいばらを切りて登り來つ吹雪にこゆる興安の嶺

〔鳥居きみ子〕

これは、鳥居きみ子女史が明治四十一年の春から約一箇年に互つて、夫君龍藏博士と共に、その幼兒を擁し、はるくくと内外蒙古の奥地探査に旅立たれた途中

の吟詠である。當時にあつては、馬背か粗雑な蒙古牛車のたすけをかるよりほかにすべもなかつたのである。しかも繊弱き女性の身に、乳兒をさへかゝへて、未知の涯しも知らぬ廣漠たる大蒙古の野をさまよひつゝ旅する心、それは今に比ぶればより以上に素朴で、所謂牧歌的な蒙古ではあつたが、時に月明の沙上遠く聞く胡弓、馬頭琴に悵然斷腸の思ひに打たれたこともあらう……。

これより先、女史は二箇年に互つて、喀喇沁王府に在つて、専心その任務の遂行に力められた。その任期の満つると、もに別れを惜まれつゝ、更に多數の男女留學生を伴つて歸朝され、彼等の爲めに親身も及ばぬ輔導に盡されたことは、その目的が深い人類愛に根ざすいはゆる東亞民族協同にあつたことは云ふまでもない。その後も女史は夫君の人類、考古學的研究の完成の爲めに、滿洲事變直後、令息、愛嬢を伴ひ、夫君と共に治安の充分恢復せぬ蒙地に入り、その踏査研究を助けられるなど、眞にわが婦徳が時代に發揮せられたもので、こゝにも、わが大

和をみなもの、時に處しては、男子にも遜らぬ健氣な強い犠牲的精神が見出されるのである。

而してその前任者として、日露戰役前に婦人の身を以て單身入蒙した河原操子女史の残された偉大な業績のごときも、亦以て國策への直接的使命の雄々しき遂行者とさへ讃へ得べき性質のものである。

更に、その方面こそ異なれ、略、時代を同うして、安井哲子女史が遠く海を超えて暹羅王國の女子教育の爲に幾多の貢獻をせられたことは、わが國の文化を海外に示すとともに、その後わが女性の同方面に對する活動の先驅をなすものである。

また近くは現に北京に於て、私費を以て崇貞學園を獨立經營し、血の滲むやうな困難と闘ひつゝ、異民族たる支那下層女子への授産と、その教養の爲めに獻身的活動を續くる清水安三氏を助けて、優にその功の一半を占めるとさへ稱せられ

たが、不幸中道にして、世を去つた故美穗子夫人の崇高な姿を偲ぶとき、「われに亦その人あり矣。」の強い感激に打たれざるを得ない。

更にまた輓近、ことに滿洲國成立以來、滿洲の曠野に黙々として大地開拓の聖鍬を振ふ多數國策拓士の蔭に、これを助け、ひたすらに精進しつゝある幾多の女性を見ることは、寔にこゝろ強き極みであつて、こゝにも日本婦道の時代的に發揮せられつゝあるを見るのである。

畢竟するに、現に進行しつゝある我が日本帝國を中核とし、盟主とする東亞諸民族の協同による新秩序建設の大業も、神武天皇の高く掲げ給うた御理想を神の導きに依つて、これを成し遂げんとするものである。

この秋に當つて、わが國の女性たるものは、單に貞淑溫良の修徳を以て満足することなく、更に併せてこの高遠なる大和民族の理想を男性と、もに分擔し、遂行するに足る雄々しき氣魄を必要とするのである。

(岡野一朗)

現代女流歌人の歌

樋口一葉

よしといひあしといふともから衣たゞ身一つをつゝむばかりぞ

若山喜志子

老いはてし父のまします信濃路よはるかに見ゆる雪のむら山

四賀光子

若竹の風のそよぎに磨る墨のにほひを立つる朝の手ならひ

今井邦子

かにかくに野に秋草の咲きいでゝ兒は片言を言ひそめにけり

茅野雅子

まれ人に椎の實まるる山住のしづかなる日や秋の雨ふる

與謝野晶子

金色のちひさき鳥のかたちしていてふちるなり夕日の岡に

日本女性の詩二篇

操は嚴冬雪ふるなかに、
ほゝゑむ寒梅にほひやたぐふ。
ほまれは千尋暗なる谷に、
潜める幽蘭かをりに似るか。
いさをは蒼溟波捲く淵に、
輝く白玉光といづれ。

嗚呼君、見えざる無上のいさを。
嗚呼君、聞えぬ至高のほまれ。

嗚呼君、知れざる究竟の操。
大なる國民、君よりおこる。
涙になさけに操に愛に、
嗚呼君、やさしき女性の力。

(土井晚翠)

一

青空に創られしもの、
日は母よ、
かゝやきぬ、げに、
かの朝風と
朗らけき古代日本。

初あり、この民族の

女性よ、われら、後あり。

二

潮騒と新しきもの、

目も青き、

地の香の愛、

見よ、島々の

豊かなる母體日本。

光あれ、この民族の

女性よ、われら、清明けし。

三

今にして美しきもの、

よき婦徳、

幽かなる眉。

聴け、とゞろける

吾が生みの未來日本。

響き合へ、この民族の

女性よ、われら、育てむ。

(北原白秋)

菊 盛

少女たち、黄菊には古代のかをりがある。

純粹に日本の寂びと氣品がある。

ああ、この静かな菊の香の苑まに坐らう。

少女たち、黄菊には九重のみけしきがある。

雲の上の日と月のにほひもする。

わかい帝の御いきづかひが聞える。

少女たち、黄菊には御鏡の明りがある。

森嚴な賢所のみけはひも澄む。

皇后宮くわんごうのみやも白い唐衣でお出ましになる。

少女たち、黄菊には紫宸殿の午後が光る。

高御座たかのみまの金の鳳、玉旛の玉や、青地錦、

かうくしい黄くわん檀染らんの御袍も拜される。

少女たち、黄菊には聖駕きやうの軋みもこもる。

儀仗兵の旗槍もちらくつぐ。

ああ、さうして日本の民族の新しい祝福が来る。

(北原白秋)

千代女の俳句

夕顔や物のかくれて美しき
蜻蛉釣けふはどこまで行つたやら
破る子のなくて障子の寒さかな
朝顔につるべとられてもらひ水
蝶々や何を夢みて羽づかひ
ころびても笑うてばかり雛ひなかな
春雨や美しうなるものばかり
花と針の心問ひたきたきかな

川柳

物差で晝寝の蠅を逐つてやり
うたゝねもいつか著てゐる母の慈悲
井戸端へ子の行く夢に母は汗
寝てゐても團扇の動く親心
花嫁は口をつぼみにして笑ひ

三重采女

天皇、長谷の百枝槻の下に坐しまして、豊樂きこしめす時に、伊勢の國の三重采女、大御盞をさゝげてたてまつりき。爾に其の百枝槻の葉落ちて、大御盞に浮べりき。其の采女、落葉の盞に浮べるを知らずて、猶大御酒獻りけるに、天皇その盞に浮べる葉をみそなはして、其の采女を打伏せ、刀を其の頸に刺充てて、斬りたまはむとする時に、その采女、天皇にまをしけらく、「吾が身をな殺したまひそ、白すべき事あり。」とまうして、即ち歌ひけらく

經向の日代の宮は、

朝日の日照宮、夕日の日耀る宮。

竹の根の根足る宮、木の根の根延ぶ宮。

古事記中三重采女に關する記事の一部

婆奴流母能故號其岡謂金鉏岡也又
 天皇坐長谷之百枝槻下為豊樂之時
 伊勢國之三重采女指舉大御盞以獻爾
 其百枝槻葉落浮於大御盞其採不知
 落葉浮於盞猶獻大御酒天皇看行其
 浮盞之葉打伏其採以刀刺充其頸將
 斬之時其採白天皇曰莫殺吾身有應

○古事記下

三七七

八百土よし、い杵築の宮、眞木柝 檜の御門。」

新嘗屋に生ひ立てる、百足る槻が枝は、

上枝は天を覆へり。

中枝は東を覆へり。

下づ枝は鄙を覆へり。」

上つ枝の、枝の末葉は、中つ枝に落ち觸らばへ、

中つ枝の、枝の末葉は、下つ枝に落ち觸らばへ、

下づ枝の、枝の末葉は、繭衣の三重の子が、

捧舉せる瑞玉盃に、浮きし脂 落ち浸漬さひ、

皆凝凝に、是しも甚に畏し、

高光る日の皇子、事の語り言も 此をば。」

故此の歌を献りしかば、其の罪赦さえにき。爾に大后、歌はしける其のみうた

大和の此の高市に、小高る市の堆。

新嘗屋に生ひ立てる、葉廣、五百箇眞椿。

其が葉の廣り坐し、其の花の照りいます。

高光る日の皇子に、豊御酒たてまつらせ、事の語り言も 此をば。

即ち天皇歌はしけらく

百磯城の大宮人は、

鶺鴒 領巾取掛けて、鶺鴒 尾行合へ、

庭雀 群集り居て、今日もかも、酒水漬くらし、

高光る日の宮人、事の語り言も 此をば。

此の三歌は天語歌なり。故、此の豊樂に、其の三重采女を譽めて、祿多に給ひき。
(古事記)

くしろまく答志の崎にいまもかも大宮人の玉藻かるらむ

柿本人麿

飯高諸高

(光仁天皇)寶龜八年五月(辛丑朔)戊寅典侍從三位飯高宿禰諸高薨伊勢國飯高郡人也。性甚廉謹志慕貞潔葬奈保山天皇(元正)御世直内教坊遂補本郡采女飯高氏貢采女者自此始矣。歷仕四代終始無失。薨時年八十。(續日本紀)

伊勢大輔の歌

古の奈良の都の八重櫻今日九重に匂ひぬるかな
 人の子の親になりてぞ我が親の思はいとと思ひ知らるゝ

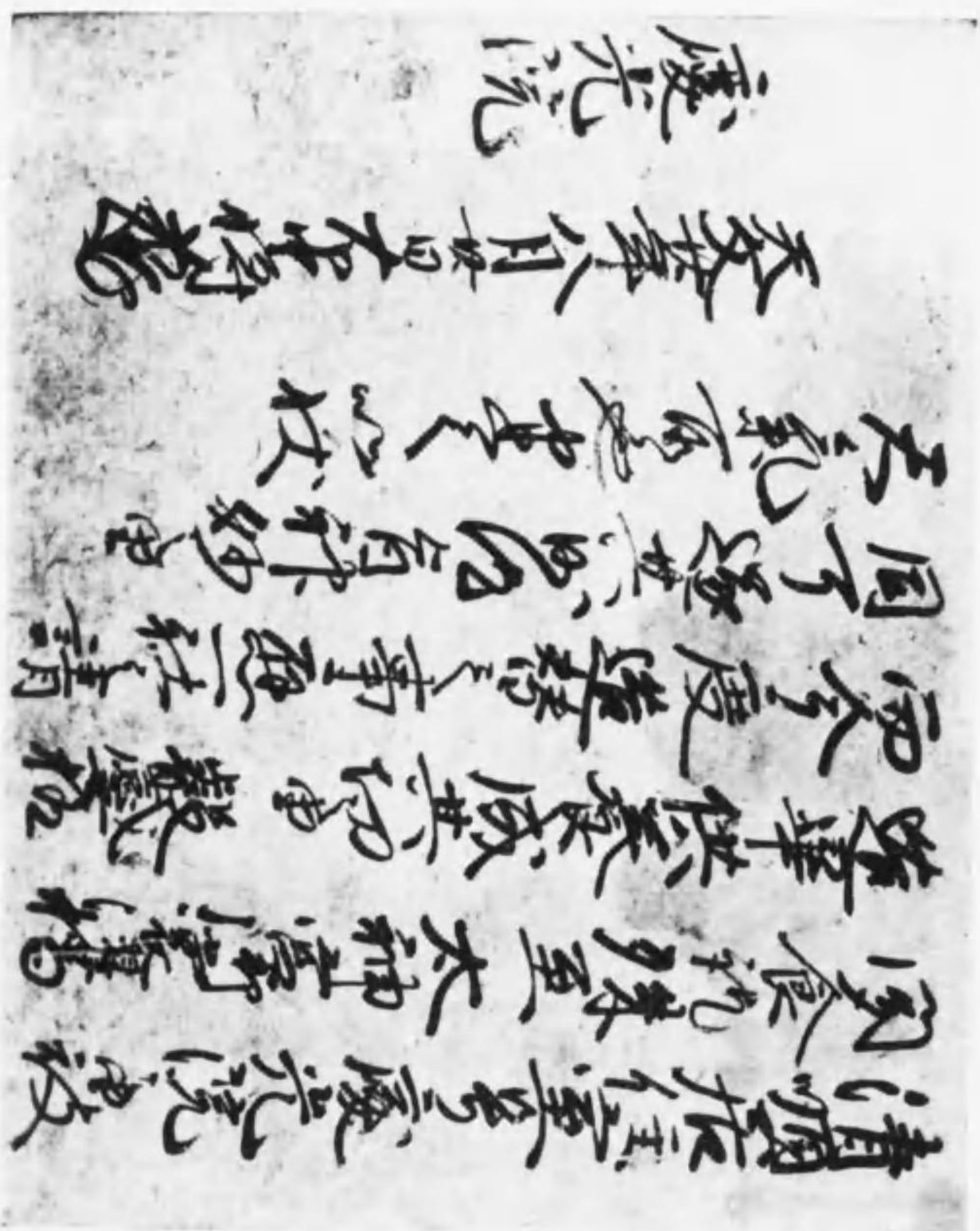
靜能制動沈能制浮
 寬能制偏緩能制急

井上金蛾

慶光院の神忠

尼守悦は、宇治慶光院の住持なり。廷臣飛鳥井氏の女なりと云ふ。年十八歳剃髮して、紀州熊野に居り、屢、神宮の所在に至り、宇治辨財天堂の穀屋に勤仕す。明應四年宇治に洪水あり。大橋を流失す。當時戰亂相踵ぎ、神宮の衰頹甚だしく、架橋の資なし。守悦自ら諸國に勸進し、永正二年を以て功を竣ふ。是に於て守悦、神忠の名縉紳の間に聞え、上下の信頼を一身に聚め、遂に慶光院を中興す。六年七月十八日寂す。二世尼智珪嗣いて寺主たり。

三世尼清順は近江國淺井郡の人、其の先き新羅三郎義光に出づ。義光二十二世の孫左京進山本義里、京極氏に仕へて功あり。後六角氏に仕ふ。清順は實に其の姉なり。長じて尼と爲り、紀州熊野入鹿に居り、慶光院二世智珪に師事し、屢、



慶光院に關はりたる繪紙

熊野より來りて宇治辨財天堂の穀屋に勤む。時足利氏の末葉に當り、戰亂相踵ぎ、朝廷の式微其の極に達す。神宮の頽廢亦甚だしく、兩宮の祠官窘窮して徒に私争を事とし、兩宮式年正遷宮の大典も、廢して行はれざること百數十年。殿舎朽壞、宮門倒潰、内陣亦雨露の侵す所と爲り、冒瀆陵夷殆ど言語に絶す。時に清順、慶光院に住して宇治に在り。深く之を憂ひ、慨然として神宮の復興に志す。乃ち初代守悅の例に倣ひて諸國を勸進し、先づ宇治大橋を造替して、法華經一萬部供養を修す。實に天文十八年なり。二十年朝廷功を賞して慶光院號勅允の綸旨を賜ふ。清順益々感奮、誓つて正遷宮復興の志を達せんとし、之を内宮の祠官藤波氏秀に謀る。氏秀意甚だ動くと雖も、而も躊躇して決せず。蓋し本地垂迹、神佛混合の流弊滔滔として天下に靡漫し、獨り神宮のみ此の弊を受けず。若し僧尼に緣りて事を擧げば、或は宮垣を穢さんことを恐れてなり。清順已むを得ず、轉じて豐受宮の造替を先にせんとし、使者を以て外宮禰宜久志本常晨（まこと）に説かしむ。常晨爲に外宮

長官松本備彦等に謀る。備彦等亦之を僧尼の手に委するを欲せず。清順憤慨已ま
ず、更に己の詔刀師家祭を司る神官足代弘興をして備彦に説かしめて曰く、若し容れら
れずんば志を轉じて力を内宮に致さんのみと。蓋し當時内外兩宮祠官の軋轢、其
の極に達したるを以て、諷するに内宮に先んぜられんことを以てし、其の決意を
促せるなり。是より先き、永正年中假殿遷宮の事あるや、兩宮祠官等各、其の先後
を争ひ、遂に公裁を仰ぎ、外宮の勝訴に歸せり。若し今日に至り内宮に先んぜら
れんか、前年の裁決も亦空文に歸せんのみ。是に於て外宮の祠官等終に清順の言
を容れ、朝廷、幕府に申請して之が裁許を請ふ。是より清順身を挺して豊受宮造
替正遷宮の事に當り、尼僧の身を以て諸國を勸進すること十一年。遂に永祿六年
九月二十三日正遷宮を執行し、永享以降百三十年の廢典是に於て復興せり。清順
更に内宮の正遷宮の執行を見んとして果さず。九年四月宇治に寂す。四世周養其
の志を繼ぐ。

四世尼周養は宇治、山幡四郎右衛門の女なり。夙に髮を剃りて慶光院清順の法
嗣と爲る。周養亦敬神の念厚く、先師清順の遺志を承けて、銳意皇大神宮造替の
事を企畫し、元龜三年二月假殿造替の繪旨を蒙り、躬ら諸國を勸化して資財を募
り、天正三年三月十六日皇大神宮假殿遷宮を執行す。時に織田信長近畿を戡定し、
先づ皇宮を修築して尊皇の衷を表す。信長周養の神忠に感じ、大に優遇す。周養
亦屢、信長の爲に戦勝を祈る。十年正月、外宮祠官正遷宮の資を信長に請ひ、造
營の端緒漸く開けたるも、未だ半歳ならずして本能寺の變あり。豊臣秀吉遺業を
繼ぎ、十二年三月兩宮正遷宮料として金子五百枚、米千石を寄せ、周養及び外宮
権禰宜上部貞永をして之を受けしむ。是より先き、十一年六月、先例に依り大神
宮正遷宮料勸進の繪旨を周養に賜ふ。周養勸進頗る勗め、得る所の造營料を併せ、
十三年十月遂に兩宮の正遷宮を行ふに至れり。寛正三年以來、皇大神宮正遷宮の
大典廢絶せること、實に百二十二年、是に至りて始めて復興す。正親町帝叙感あ

り。繪旨及び宸翰の扁額を周養に賜ひ、其の功を賞す。是に於て神宮と慶光院との關係親密と爲り、朝廷よりは屢、國家安全寶祚長久の祈禱を命ぜらる。秀吉亦度會郡磯村の内百石を寄せて之を褒す。朝野の尊信隨ひて厚し。既にして式年正遷宮の期漸く近づくや、周養復、資を徳川幕府に請ふ。幕府乃ち朱印を周養に下して、兩宮正遷宮の事を行はしむ。爾來神宮造營の資は幕府の辨ずる所と爲り、復、慶光院の募縁を勞せず。是より先き、慶長六年二月宇治大火、大橋燒失す。周養其の改架を豊臣秀頼に請ひ、十一年四月功を竣ふ。尋いて十四年九月兩宮正遷宮成る。周養の神宮正遷宮式に與ること前後二回なり。慶長十六年四月二十六日を以て寂す。

五世尼周清は、山田祠官河合氏の女にして、四世周養の姪なり。周養の弟山本義時の猶子と爲り、慶光院に入る。慶長五年五月、上人號を賜ひ、紫衣を許され、朝廷の禱祀を命ぜらる。八年九月徳川家康征夷大將軍に任じ、先例を以て朱印を

周養に下し、式年正遷宮の事を執行せしむ。周清師を佐けて専ら事に従ふ。十六年四月周養寂して五世の住持と爲る。寛永二年十二月、幕府又兩宮正遷宮執行を周清に命ず。爾後萬治二年皇大神宮臨時遷宮に至るまで慶光院は常に之を奉仕す。周清徳川氏の庭闈に出入して、將軍の親昵を得。營中爲に一室を設け、府下別に邸宅を賜ひ、而して往來には亦驛馬を給せらる。又中宮東福門院の寵眷を蒙り、常に祈禱の命を奉じ、京都に邸宅を賜ふ。公武の間に來往して隱然勢力あり。世之を伊勢上人或は遷宮上人と稱し、熱田の誓願寺、善光寺の大本願と與に、日本三上人の名あり。寛永十一年將軍家光伊勢國度會郡磯村の内二百石を寄せ、尋いて百九石を加ふ。曩に秀吉が周養に寄する所を合して四百九石を食み、別に兩宮神領の内百八十石を分ち領す。寛永十一年退老して六世周寶をして繼がしむ。慶安元年九月寂す。明治三十八年十一月天皇伊勢に行幸の次、慶光院歴代の神忠を追賞せられ、特旨を以て守悦に正四位、清順に従三位、周養に正四位を贈り給ふ。

(先賢遺芳)

芭蕉の文並に俳句

便りも文月の魂祭る頃、武陵より古里に歸るに、二十とせの月日も夢なれや。
 北堂の萱草も霜枯れて、今はその面影だに無かりしが、何事も昔に立ち變りて、
 はらからの鬢白く眉皺みて、つれなき命ありとのみ、云ひ出づる言の葉もなき
 に、兄の守袋を解きて母の白髮拜めよ、浦島が子の玉手箱、汝が眉もや、老いた
 りと、年月の怠りはかたみに泣きつゝ、

家はみな杖に白髮の墓まゐり

代々の賢き人々も、古里は忘れ難きものに覺え侍るよし。我今ははじめの老も
 四とせを過ぎて、何事につけても昔のなつかしきまゝに、はらからのあまた齡傾
 きて侍るも見捨て難く、初冬の空のうち時雨るゝ頃より、雪を重ね霜を経て、師

松尾芭蕉の筆蹟



走の末伊陽の山中に至る。猶父母の在いそかりせばと、慈愛の昔も悲しく、思ふ事のみあまた有りて、

古さとや臍の緒に泣く年の暮れ

(白髪吟)

芭蕉の俳句

たふとさに皆押し合ひぬ御遷宮
初時雨猿も小蓑をほしげなり
名月や池をめぐりて夜もすがら
梅が香にのつと日の出る山路かな
荒海や佐渡に横たふ天の川

度會園女の俳句

いそがしや葦を摘めば土筆
寝どころへ扇にすゑし螢かな
負うた子に髪なぶらるゝ暑さかな
風やつゝいて啼きし猿の聲
ある程の伊達仕盡して紙衣かな

おもしろう松笠燃えよ薄月夜

冬梅の一つ二つや鳥の聲

服部 土芳

さつ女

一志郡七栗郷一色村にさつといへる娘ありて、老耄したる父母に孝養を盡すこ
と、里人の感歎する所なりしが、薄命の者には凶事相つゞく事多くして、或年の
春の初に母を亡ひ、また秋の終に父を亡ひぬ。さつの悲歎いふべきにあらねば、
里人等その不幸を憐み、各、來りて之を助け、漸くにして葬をも濟せけるが、偕
百ヶ日の祭過ぎければ、さつは村内にて父の借り置きし金銭を償はむが爲とて、
奉公に出てむといふに、里人等は婿をとりて家督をせよと勧めけれども、さつ毫
も肯はず、只借財を返さねば兩親の靈も穩には坐さじと、堅く頼みて、享保九年
甲辰の春安濃郡澁見村なる某方へ年期定め奉公に入りぬ。かくてその年の三月
下濬、或日の黄昏頃、一頭の鹿獵夫に逐はれ、わが軒さして逃げ來りしが、見る

さつ女

四五七

間に厠と萩垣との間へかくれぬ。

獵夫之を見失ひ、遂に他方へぞ追ひ行きける後、さつ近くよりてその鹿を見るに、手負ひたりと見え、苦しみ惱める状いと哀れに、特にうゑたりとみえければ、尙更不便の事なりと思ひ、日の没りはつるを待ち、己が夕食の半を分かち、もち行きて與へたるに、鹿は嬉しき面貌爲しつゝ、その食をくひ盡し、やがて又西方をさしていで去りぬ。さてさつ其の後も慈仁深くして、かゝる所行抄からざりしが、その後深く此の家夫婦の心に協ひ、親族中の人々にも愛せられければ、遂に當家の嫁となり、大いに幸をえしとぞ。それ仁慈は他の爲にはあらで、やがてわが身の爲となること明なり。禽獸蟲魚の上にも及ぼしたきは慈愛の行なりかし。(三重縣德行錄)

山田利登

山田利登、寛保元年安濃津八町に生る。幼にして父母を喪ひ、近親の鞠養を受く。後山田古市の娼樓千束屋久五郎に嫁す。利登舅姑に事へて順、夫に事へて貞なり。嗣子天し、幾もなく夫亦死す。一時樓を閉ぢ、松阪に屏居す。利登奮然決する所あり。再び古市に來り舊業を復し、能く家事を宰理し、狹斜の巷に在りて、毫も輕浮安逸の風なく、儉素自ら奉じ、質實克く守る。婢僕風化し、郷黨視て以て寡婦の範となす。家漸く富を致して、儉素謙讓の念愈、堅し。後其の生業の終に子孫に禍せんことを恐れ、斷乎として店舗を閉ぢ、勤儉自ら處る。而して公益の爲に財を捐つるを吝まず。古市の東に牛谷坂あり。内宮外宮間の要路にして、延寶年間内宮祠官藤波氏富の整修を経たりと雖も、坂路猶險峻にして行旅甚

だ艱む。利登夙に之を慨し、貯ふる所の私財八百兩を官に獻じ、以て新路を開鑿せんことを請ふ。官其の特色を嘉して之を許す。其の年工を起し、二年にして成る。開鑿する所の道路、幅四丈八尺、之を整平すること一丈乃至九丈六尺四寸、長さ百九十四間に至る。費す所前捐八百兩の外、尙雜資二百兩あり。皆悉く之を辦ず。之を舊路に比すれば夷にして直く、行人今に至り謳歌して過ぐ。文政十一年十一月二十九日病みて死す。年八十八。明治二年官其の偉功を賞し、子孫に苗字佩刀を許す。四年中此の阪路及び山田倭町尾部坂の道路、霖潦の爲に崩壞す。利登の裔山田千束祖先の遺志を繼ぎ、金百二十圓餘を抛ちて之を修理す。

(先賢遺芳)

清水ことと女

何處の人たるを知らず。小川町に棲み、老後には兩宮へ日參することを勤めとなし、「おかず日參」と稱せられた。文久元年(紀元二五二二)十月三日九十二歳にして歿した。

ことと女の日參は山田市内各戸に就きて錢穀を受け、その施主の爲に兩宮に日々の代參を爲すのであつたが、斯様な賤しい身分であるにも拘らず、天性慈愛の心深く、孤兒又は貧窮者の兒女を引取つて養育した様子は、丁度現今の孤兒院の事業と同じである。市内家々に於ても其の奇特を感じ、慶弔の事ある際は成るべく彼の女を賑はすやうにと心掛けたほどである。彼の女は乞ひ得たる御初穂は、此等兒童の養育費とする外は、決して濫費せず。成育した孤兒には適當なる職業を得

しめ、また配偶者を求めて、一家を構へさするまでの懇切を竭したものである。安政年間に外宮北御門の石垣改築の際は、神恩の萬一に報い奉らんとて、日頃の蓄積を傾けて、金十兩を土手普請に寄附したと云ふ事である。晩年孤兒の中に養嗣を求めて、家を立てしめたが、死歿したる後は絶家の止むなきに至つた。

(宇治山田市史)

蓬摘む日も此の道や芹なづな

鶯の調べもふかし竹の奥

中川乙由

加兵衛後家ゑん

右の者姑へ孝心に仕へ申候。ゑん儀當年四十五歳に罷成、夫加兵衛は十五年以前病死仕候。姑誓心、幼少の子供、加兵衛弟宇兵衛共四人の世話仕り暮し居り候。右宇兵衛儀は亂氣者にて御座候。右誓心儀及老年居候故、常々不自由無御座様心懸誓心申候事を不背、朝夕たべ物等も心に叶候様に拵へ給はせ、其の上誓心七年以前より腰拔居候處、晝夜そばを不離、用事に付外へ罷出候ても母待かね居可申と申候て、早く歸り、介抱のみ仕り、暑さの節は涼しき所へ寢所を拵へ休ませ、寒氣の節は日の照込候所へ寢所を拵へ屏風を立廻し、一日之内には幾度も居所をかへ、心安き者共參候得ば、母のそばへ參り逢ひ呉れ候様申し、逢はせ悦ばせ、勿論兩便共手に掛け、年來介抱能仕へ申し候を、誓心常々満足仕り、隣家

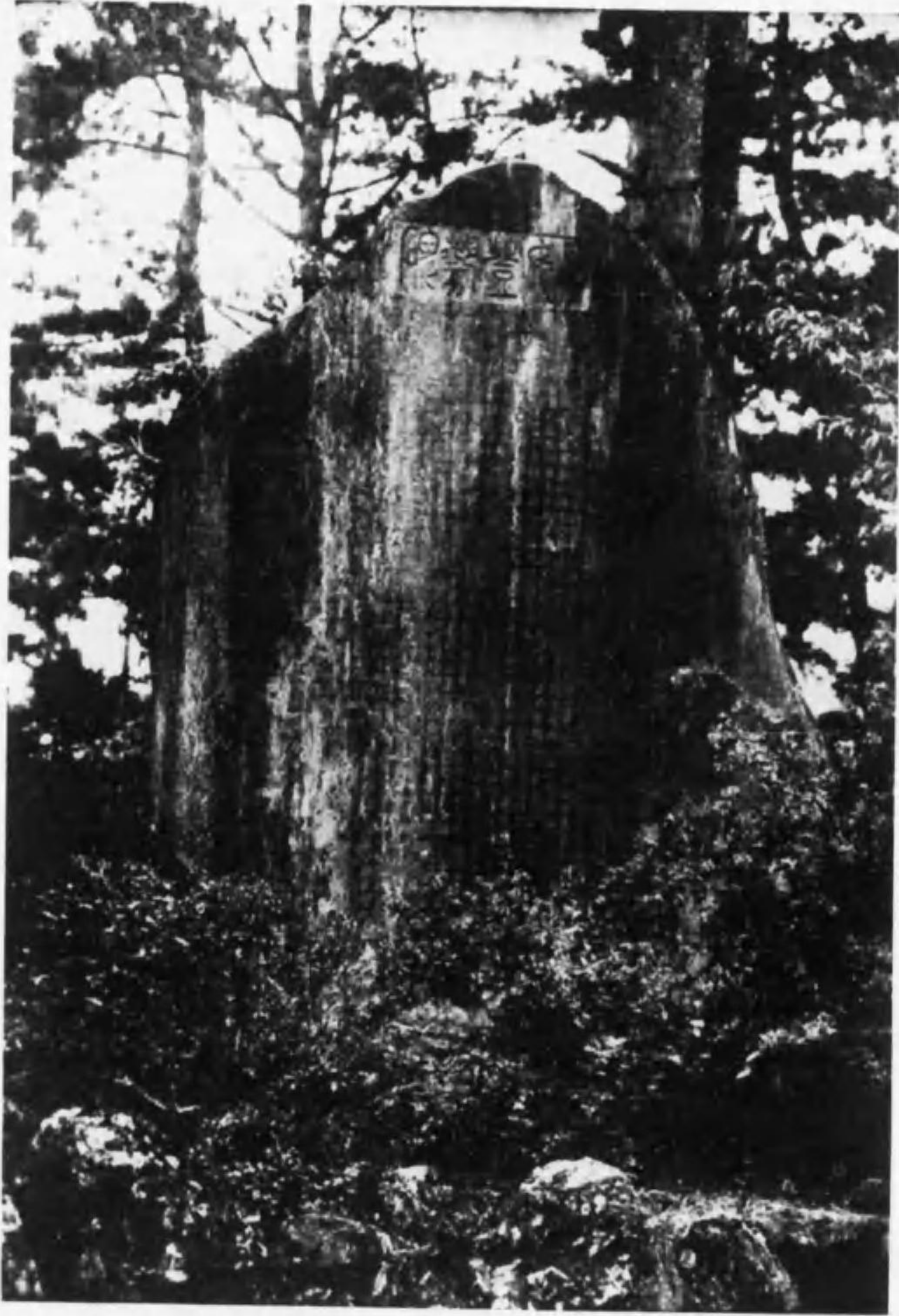
加兵衛後家五ん

四六四

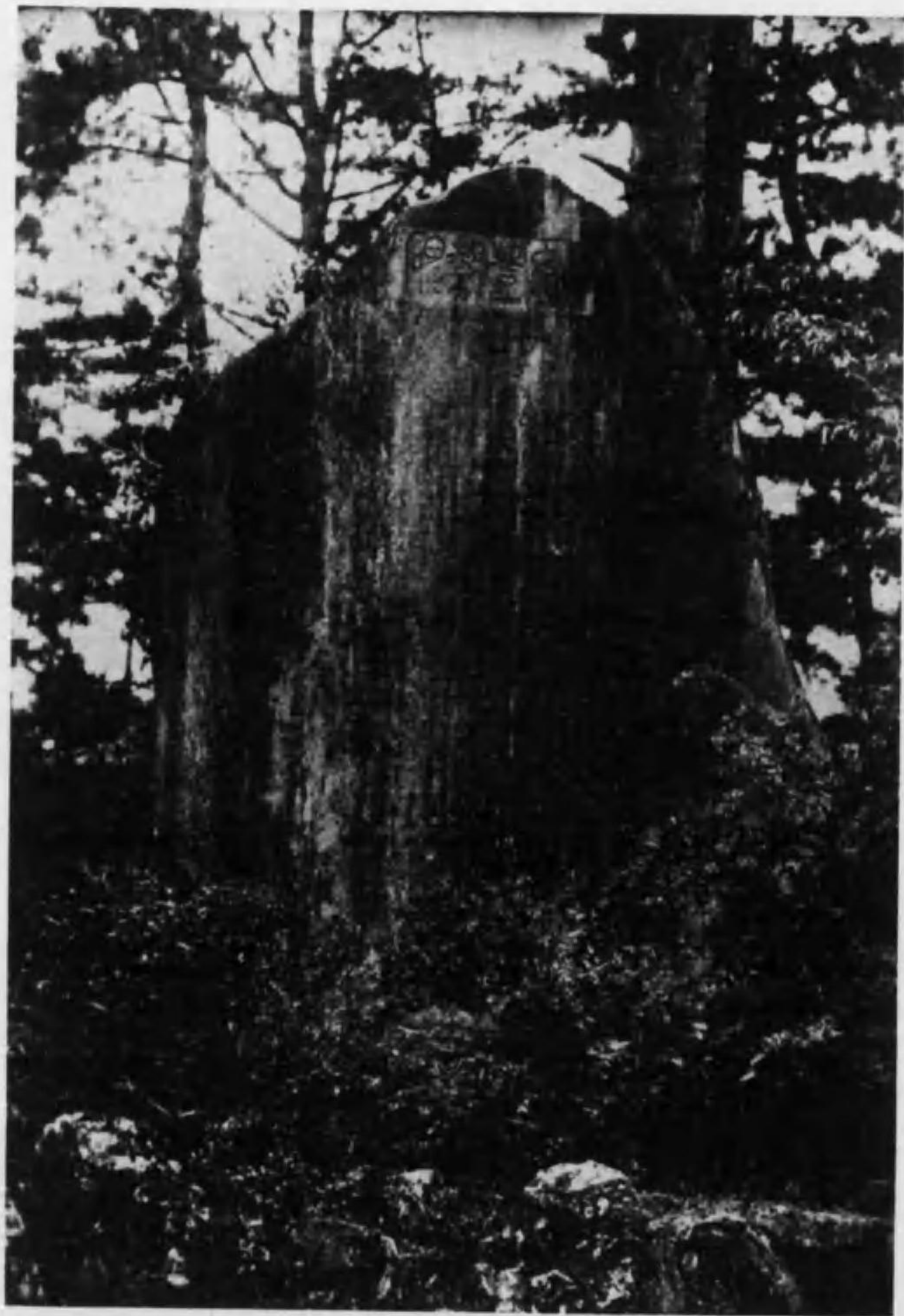
の者共参り候得ば、えん儀扱々孝心にいたし吳候に付、不自由成る儀終に無之、孝行に致吳候段申盡、朝夕佛を拜み候頃には、えんを拜み暮し候趣申候、誓心實子娘近所へ縁付仕居申候、右娘去々年死去仕候。其の節も人々悔を申候得ば、一人の娘の儀故、愁傷には存候得共、えんに離候程には不存候、えん若し我より先へ病死等いたし候儀在之候は、我もともに果可申と存候抔と、えん事のみ厚く尊仕、悦申候。其の外何によらず、至つて心底厚く相見え、箇條難申上奉存候。然る所誓心當八月九十歳にて果申候。隣家の者共、右之趣常々見及聞及、感心仕候儀に御座候に付、乍恐御注進申上候。

明和元甲申年十月

(勢陽善人録)



津公園にある孝女登勢須徳碑



津公園にある孝女登勢頌徳碑

加兵衛後家五ん

四六四

の者共参り候得ば、えん儀扱々孝心にいたし呉候に付、不自由成る儀終に無之、孝行に致吳候段申盡、朝夕佛を拜み候頃には、えんを拜み暮し候趣申候、誓心實子娘近所へ縁付仕居申候、右娘去々年死去仕候。其の節も人々悔を申候得ば、一人の娘の儀故、愁傷には存候得共、えんに離候程には不存候、えん若し我より先へ病死等いたし候儀在之候は、我もともに果可申と存候杯と、えん事のみ厚く尊仕、悦申候。其の外何によらず、至つて心底厚く相見え、箇條難申上奉存候。然る所誓心當八月九十歳にて果申候。隣家の者共、右之趣常々見及聞及、感心仕候儀に御座候に付、乍恐御注進申上候。

明和元甲申年十月

(勢陽善人録)

孝女登勢

登勢は員辨郡阿下喜村の農近藤傳藏の女なり。天明八年を以て生る。初め山田、井村吉兵衛に養はる。吉兵衛子を擧ぐるに及び、再び安濃郡連部村、前田傳藏の養女と爲る。時に年甫めて六歳、後、傳藏夫妻俱に悪疾を病み、力作すること能はず。家計日に窘迫し、遂に食を郷閭に乞ひて纔に活く。登勢時に年十三。深く其の窮苦を悲しみ、請ひて近郷農家の婢と爲り、少許の傭錢を得て以て父母に奉ずれども、固より餐に充たず。登勢乃ち主人に乞ひて己の食を減じ、剩し得たる所を以て毎夜父母に捧ぐ。黎明より終日主家の勞役に服し、家に歸れば則ち終夜枕頭に侍し、未だ曾て一日も懈らず。郷俗時時奴婢を放ちて恣に休息せしむ。之を日待と曰ふ。登勢此の日には必ず家に歸りて終日父母を慰むるを以て

樂とす。人あり、謂て曰く、汝主家に在れば寝ぬるに重衾あるも、家に歸れば弊蓆も猶身を蔽はず。何を以て歸るを樂しむやと。答へて曰く、吾唯父母の疾を憂ふるのみ。煖衾と弊蓆とは問ふ所にあらずと。前の養父吉兵衛登勢が艱苦を視るに忍びず、頻りに復歸を勸むれども應ぜず。曰く、撫育鞠養茲に幾春秋、恩義所生の父母に勝る。今之を棄て、去らば、誰か病親に侍らん。妾豈海嶽の恩に背くに忍びんやと、言訖りて潛然として泣く。生母再嫁して四日市に在り、亦頻りに歸るを促すと雖も、毫も意を動かさず。奉養愈、厚し、深更人の寝ぬるを待ちて、河畔に父母の膿血に汚れたる衣裳を濯ぎ、寒時には薪を拾ひ、焚いて煖を取らしむ。斯の如きもの三年一日の如し。傳藏夫妻夙に熊野温泉の效あるを聞き、一日竊に相携へて家を出づ。蓋し登勢の諫止せんことを恐れてなり。登勢夜に入り、始めて之を覺り、驚き馳せ、追ひて松阪に及ぶ。泣いて請ひて俱に行く。乃ち食を門戸に乞ひ、露宿風餐月を踰えて紀伊に入る。路八鬼山の險に遭ふ。而して父

母竝に困頓、雙脚腐腫し、膿血滴りて、復、歩を進むる能はず。三人相擁して泣く。登勢奮然父母を勵まして曰く、「請ふ往け」と。乃ち遞次之を負ひて險を陟り、備に艱苦を嘗む。路人見るに忍びず。皆面を背けて過ぐ。斯の如き數旬纔に熊野に到る。乃ち澡浴之を久しうすれども癒えず、去りて西國の靈場を巡拜し、半歳にして歸る。然れども村人の視るを厭はんことを恐れ、夫妻竊に謀りて善光寺に賽し、路上に斃死せんことを期す。一夜復告げずして出づ、明日登勢之を覺り、追ひて別保村に至れば、二人痾疾に罹りて困倒せるに遇ふ。之を見て慟哭地に倒る。乃ち看護すること數日、強請して復俱に行く。木曾の險を過ぎ、具に艱辛を嘗む。善光寺に賽して途に温泉に浴し、再び郷里に歸る。文化五年津藩主藤堂高兌其の孝を聞き、米二十俵を賜ひて之を賞恤す。一日鷹を放ちて連部村に至り、召見して手づから金員を賜ひ、侍醫をして父母の疾を診察せしめ、且田一段一畝二十五歩を與へ、永く租賦を免じ、其の孝を旌表す。遠近相傳へて、金穀を贈る

もの多し。幾ならずして傳藏死す。登勢夫を迎へて家を繼ぐ、後數年にして母亦死す。其の父母の喪に丁りて、哀毀慟哭人をして惻然たらしむ。高猷封を襲ぐに及び、又數、賑恤する所あり。天保十一年七月十三日病みて死す。年五十三。明治二十五年有志、碑を津公園に建て、其の篤孝を表彰す。(先賢遺芳)

久方の月の桂も折るばかり家の風をも吹かせてしがな

菅原道眞母

惜しからぬ命ながらもたらちねのある世はかくてあるよしもがな

小澤蘆庵

荒木田麗の文並に歌

義良親王も同じごとと下らせ給ふべき御定なれば、奥の軍は悉く従ひ奉る。さるは此の度みこは坊にゐさせ給へり。御兄の宮達も數多おはしましつるに、帝いかゞ思し召しけるにや、この御事の俄に定まり給へるもめてたき御宿世になむ。今は鄙の長路を凌がせおはしまさむ事もいとかたじけなかるべきを、國にてこそあらはさせ給はめ、道の程などは御よういあるべく仰せられて、やがて舟にて下らせ給ふべきなりとて、文月末つかた、まづ伊勢に越えさせ給ひて、其所より御舟に奉り、長月十日比、伊豆の海といふわたりを過ぎさせ給ふ程、俄に空のけしきはりて、須磨の御被の餘波おもほゆるばかりの嵐、おどろくしう吹き出でたるにぞ、多くの舟共は大海の浪にたゞよひて、行衛もしらずなるもあり、又こと浦

によるもありしに、みこの御舟ばかりはいかに吹き分けたるにか、もとの海によりて、篠島といふ處に著かせ給ふ。芳野殿にも事の聞えありしかば、勅使として僧正頼意をつかはされしに、歸り参りて、ことのよし奏し侍りけるついでに、

神風や御舟よすらし沖津波たのみをかけしいせの濱邊に
誠に限ある御身の、例なき鄙の御住居を、神もいかゞと思し召されて、かくはと
いめ申させたまへるにこそと、宮司共も申しあへり。其の後ぞ、また芳野に歸り
いらせおはします。(池の藻屑)

荒木田麗の歌

川波の色もわかかれて霞さへひましらみゆくはるの曙

こぎ出でし舟路は波のはるくと千さとをかくるこゝちこそすれ

大野 志 ず る

刀自は明治九年十月十三日三重郡楠村に生れ、長ずるに及びて同郡富田町大野作左衛門氏に嫁す。家は同地方に於ける素封家にして信望遠近に高く、作左衛門氏亦敦篤の資を以て徳を郷黨に施き、老幼皆其の化に服す。

刀自資性温良にして才氣あり。常に心を青年子女の教化に傾け、率先範を垂れ、躬行衆を率ひ、指導訓諭倦むことを知らず。明治四十四年一月富田町に處女會の組織成るや、推されて其の會長となり、家政の傍ら日夜奔走して事業の發展に努め、教化の効頗る昂る。大正十二年二月其の組織を改めて女子青年團となるや、復衆望を負ひて團長と爲り、爾來十有餘年、一意女子の教養薰陶に心を勞して今日に及べり。

由來富田町は漁業者生民の大部分を占め、風俗習慣多くは野卑に流れ、心を子女の教養に致すもの稀にして、豊漁あれば浪費濫費を恣にして、節約貯蓄することとを知らず、爲に男女青年の風儀の如きも著しく亂れて、識者の等しく鑿鑿を買ふこと尠からず。刀自之を歎きて、日夜訓誨甚だ力むと雖も、因襲久しきに互りて、改過遷善の實容易に擧らず。野媼村嬢時に目を恃て、處女會に對する非難の聲を放つを耳にするに至れるも、刀自は固く心を定めて毫も意に介せず、益、責任の重大を感じて、専ら意を處女の薰陶と一般の矯風に用ひたり。大正十二年女子青年團の組織成るや、「強くやさしく眞面目に働け」の團訓を制定して團員を率ゐ、一に國民精神作興詔書の御趣旨を奉體し、質實柔和にして、表裏なく、其の業に精勵することをモットーとし、其の徹底を期する爲、或は團襪或は團手拭等を作り、團訓を染めて之を團員に配付し、團體作業時に於ては勿論、平素家庭に於ても、常に之を使用せしむること、せり。又團員にして結婚の爲、退團する者

あるときは、必ず團訓入りの袱紗を贈ることを例とす。而して團員に勤勞の實習をなさしむる爲、會合或は勤勞週間等の小閑を利用して、廢物利用による雑巾刺し、鼻緒製造等の共同作業を課するの外、大正十二年以來自宅の裏畑を提供して處女園を設け、四時絶えず花卉を栽培して、或は死亡團員の墓前に手向けては友情を厚くし、或は寺院に獻花しては祖先崇拜の念を深からしむる所多し。又團員の社會奉仕的訓練に深く意を注ぎ、共同作業によりて製造したる雑巾、鼻緒等の販賣益金を以て傘百數十本、提灯六十餘張を購入して、不時の降雨に苦しむ者の爲に、富田警察署人事相談所、富田驛、西富田驛の各構内及び富田小學校に配備したるを始め、一般通行人の便を圖る爲、街路の分岐點に花崗岩にて作りたる道路標を設置し、又團員の製作したる前鼻緒を町内各要所に吊して、道行く人の不時の用に供する等、平時に於ける社會奉仕をなす外、非常災害時に際しての活動は一層見るべきもの多く、彼の大正十二年九月關東大震災起るや、直ちに團長自

ら陣頭に立ち、團員を激勵して慰問品の募集をなし、數日ならずして現地に發送したる食料品日用品等實に數百點に達せり。

又當時來富する避難民の爲に、富田驛に救護接待所の設けらるゝや、團員を指揮して食料品、飲料水を配給し、懇切なる慰問をなし、翌年一月には震災罹災者の爲に追弔會を営みて、懇に其の靈を弔へり。其の後丹後、但馬、豆相等各地に頻發したる震災時に際しても、同じく義捐する所多く、今次の支那事變に際しては、或は應召兵士の家族慰問に、或は出征軍人の慰問金品の募集に努めて銃後を護る團員の赤誠發揮に貢獻する所尠からず。將來有爲なる主婦たらしめんが爲に、女子青年の講習、講話會を開催すること屢、にして、其の度毎に自ら講師となるを常とせり。大正十三年三月長期夜間講習會を開催するや、連夜に互りて熱心指導教化に努めたりしが、一夜感激興奮の餘り、聲涙共に下る熱辯を振ひつゝ、ありし時、俄然壇上に打ち倒れて危篤に陥る。爾來家人を始め、團員の熱情による

看護を受くること半歳に及びて、漸く一命を取止めたるも、遂に半身不隨となれり。然れども毫も屈する所無く、身を杖に托して尙壯者を凌ぐ意氣を以て、益、處女の指導強化に當りつゝあり。この悲壯なる意氣には、團員を始め、一般婦人も感激奮して思服せざるは無く、爲に團の面目は頓に改まり、町の習俗亦面目を一新するに至れり。

刀自又常に小學校教育を重んじ、毎月一回は必ず學校を訪問し、缺席兒童ある場合は其の理由を調査して、貧困兒に對しては、陰かに其の家庭を訪問して、私財を以て學用品、食料品、衣服等を給與し、高等科の女生に對しては、放課後自家經營の工場製網手内職をなさしめ、相當の賃金を與へて出席を督勵する等、當局を援助すること尠からず。又敬老の念厚く、毎年陽春の候を卜して、七十歳以上の高齢者を自家に招待して、慰安をなすを以て例とせり。又慈善心に富みて、貧困者に金品を給與する外、感化、孤兒院等の事業に對しても、常に物質的援助

を怠らず。

刀自の家庭にあるや、夫唱婦隨よく家庭を整へて、家業の振興に努め、現に數百名を使用する大工場の經營宜しきを得、益々繁榮を見つゝあるは、刀自内助の功に俟つ所尠からず。(三重新民)

伊勢・志摩の海

南歐の風光、地中海の大觀を見馴れた西洋人でも、日本の海岸美には一驚を喫せずには居られないさうだ。その日本の沿海の美、その美の最も遺憾なく發揮されて居る處は決して少くあるまいが、自分の見た中では、伊勢の海からかけて志摩・紀伊の沿岸に如く處はない。優美に傾かず、凄凉に過ぎず、さりとして甚だ平凡に陥らず、港灣が相接し、島嶼が相連なり、斷江・荒磯・漁村・蟹戸、燈臺もあれば松原もある。海水が深く陸に入つて、恰も溪流のやうな入江をなすかと思へば、月光が閃々として千里の海上を照らし、斜に欹つた一帆の片影の遠く雲外に消える光景など、殆ど應接に遑がないというてもよい。

伊勢・志摩の海！

いかに變化に富み、明暗に富み、空想に富んで居ることだらう。自分は嘗て三河國の最南端、渥美郡の一角、伊良湖村の絶端にある古山といふ山の上に立つて、一眸の下に伊勢・志摩の海を見渡したことがあつた。夏だつたが、日は一時間ほど前に遠く向ふに打渡された伊勢朝熊連山の陰に落ちて、一時美しく西の空を彩つてゐた種々の形や種々の色の面白い夕べの雲も、いつ消えて行くともなく消え果てて、もう薄暗い夕暮の光が、何處ともなく暗碧の波の上に寄せてゐた。

見渡すかぎり、舟といふ舟、帆といふ帆は一つもなく、たゞ海の處處に白く碎ける波の頭が見えるばかりで、その淋しさといつたらなかつた。左の方に、海上一里ばかりを隔てて神島が見える。丁度甕を倒さまにしたやうなので、一名甕島ともいふさうだが、この島は行つて見るとなか／＼風情に富んで居る。西の山陰に數十戸の漁村、そこには桂光院といふ寺、村役場。それからその島を廻つて東に行くと、怒濤が天を吞まうとするやうな絶海に臨んで、絶大な洞窟の奇觀、満

潮毎にその中に吞吐する海水の響は、恰も巨人が天に向つて叫ぶやうで、その壯觀は到底都人士の想像し得るところでない。神島の少し右方に當つて黒い／＼大島の影、それは志摩の答志島だ。菅島・飛島、その他無数の大島・小島。

日は漸く暮れて、海の色は愈々黒く、その上に浮かぶ島々の影も微かに、星の瞬、遠海の瞬、遠山の姿、自分は深い空想に耽つた。「平和！人の世の平和とは抑、何ぞや。」自分がかう叫んだ。平和を望む心、平和を欲する念、遂にこれおのれの弱きを表白して居るではあるまいか。見よ、この自然を。見よ、この大觀を。海は四方から來て陸を吞まうとし、陸はこれを拒ぐべく全力を盡くして居るではないか。鳥・岩・岸、此等は皆陸の遣して以て海の怒濤を拒がせるものではあるまいか。けれども、海は時の永久の力を藉りて、次第に陸を侵蝕し、島を崩し、岩を碎き、岸を陥れて、漸次陸の運命を縮めつゝあるのではあるまいか。

「戦闘！」と自分は叫んだ。實際この伊勢の海の大觀に接すると、誰でも戦闘

といふ感を起さずには居られまい。水と陸と波と山とが、いかにも互に刃を交へて居るやうに配置されて、伊勢の内海はまるで海水に攻め落されたやう。その海門を守る諸島の影は、孤城落日の状態に陥りつゝ、なほ陸のために節を守つて奮闘して居るやうに思はれるのだ。

若し人が、自分が空想に耽つたやうに、その古山の一角に立つて、薄暮の影の四方に満ち渡るのも知らずにゐたならば、千鳥の淋しげに鳴く聲が、歌のやうにその耳を掠めるので、覺えずその恍惚から覺めるだらう。その時は、影の低いばら／＼松の間を過ぎて、外海に面した荒磯の方へ辿り行くがよい。そして、松原を出て了つたならば、足を留めて神島とその向ふに遠く微かに連なり渡つた志摩の山脈との間を見るがよい。

月の夜には、その明らかな光に紛れて、それと分明に見出すことは出来ないかも知れないが、闇の夜には、物凄しい波の上に、大凡一分間ぐらゐづつ間を隔てて、

線香花火のやうにびかつと光つて、そしてすぐ消えるものがあるだらう。何だと思ふ。燈明崎——志摩國安乘の廻轉燈の光だ。

あゝ、この詩趣に富んだ燈臺、自分は殆ど想像するにも堪へないのだ。絶海の畔、漁村を距たること數町、磯馴松が風に吹かれて、皆面白く斜に捻れて居る半島の絶端、懸崖千丈、暴風雨の荒れる夜などは、怒濤の響、松の響、海の鳴る響、風雨の吼える響、それらの凄しい力に殆ど燈臺が吹き飛ばされて了ひはしないだらうかと疑はれるばかりのその燈臺に、若い空想がちな青年、さうでなければ、年老いて世の荒波に漂ひ果てた老爺、それが、靜かに穩やかに、世の中ではとても見ることの出来ない悠揚たる態度で、海に悩む船人のために、その夜毎々々の勤を怠らない淋しい生活。どんなに空想に乏しい人でも、これを見ては必ずさまざまの想像を起さずには居られまい。

(田山花袋)

安乗の稚兒

志摩の果、安乗の小村、
はやて風岩をどよもし、
柳道木木を根こじて、
靈空飛ぶ斷れの細葉。

水底の泥を逆上げ、
かきにごす海の疾、
そそり立つ波の大鋸、
よげとこそ船を待つらめ。

とある家に飯蒸せかへり、
男もあらず女も出て行きて、
稚兒ひとり小籠に坐り、
ほほゑみて海に對へり。

荒壁の小家一村、
反響する心と心、
稚兒ひとり恐怖を知らず、
ほほゑみて海に對へり。

いみじくも貴き景色、
今もなほ胸にぞ跳る。

少くして人と行きたる

志摩の果安乗の小村

(伊良子清白)

枝高き松風も静かなる神路山。

とことにはにのどかなる我が君が代のしるしよ。

落ちくる雲こそ大神の御恵なれ。

この世ならぬ心地をする、見るもたふと、神路山。

仰げや、人々よ。

ためしあらぬ神の國。

武島羽衣

雙 殉 行

戰雲壓城城欲壞。

聯隊旗兮臣所掌。

旅順巨礮千雷轟。

二萬子弟爲吾死。

青山馳道連朱闕。

靈輿肅肅牛步遲。

弔礮一響臣事終。

旁有蛾眉端坐伏。

遺書固封墨痕濕。

雙 殉 行

腹背受敵我軍敗。

爲賊所奪臣罪大。

骨碎肉飛血雨腥。

吾何面目見父兄。

萬國衣冠儼成列。

金輪徐輾聲如咽。

刺腹絕喉何從容。

白刃三刺纖手紅。

責躬誠世情尤急。

雙 殉 行

四八六

言言都自熱腸進、
嗚呼以身殉君臣節堅。
忠魂貞靈長不散。

鬼哭神恫天亦泣、
舍生從夫婦道全。
千秋萬古侍桃山。

(竹添井井)

見るにつけ聞くにつけてもたゞ君のまごころのみぞしのばれにける

東 郷 平 八 郎

齋藤掛堂の筆蹟

魏注深委倭宗成、
身似野臣片如山、
昔病更強煙心寂、
自持筆墨此描世、
持法便

齋藤掛堂

雙河行

言言都自熱腸進。
嗚呼以身殉君臣節堅。
忠魂貞靈長不散。

鬼哭神恫天亦泣。
舍生從夫婦道全。
千秋萬古侍桃山。

(竹添井井)

四八六

見るにつけ聞くにつけてもたゞ君のまごゝろのみぞしのばれにける

東郷平八郎

奇藤拙堂の筆蹟

總法深委倭軍成空居志守月令
才似暉臣片如名山如谷日如奉
昔之何更強煙霧疾雨事丁多操風
月將至月出梅甘多物裁也福石
持法使

持法使

梅溪游記

一目千本、尾山八谷之一也。花最饒。故有此名。蓋比芳野、櫻谷云。余與同人、出三學院、下前崖、覺山水與梅花皆已佳絕。任意而行、至一大谷、文稼識而言之。徑詰曲而上、花夾之。步出其間、如躡白雲而行。數百步達巔。下顧彌望、皜然與溪山相輝映。余嘗遊芳野、觀其一目千本、有此盛而無此勝。又嘗觀嵐山櫻花、有此勝而無此盛也。更求之西土、以梅花名者、杭之孤山、境蓋幽花則寥寥。蘇之鄧尉、花頗多地、則熱鬧。唯羅浮梅花村、對峻峰、臨寒溪、而花尤饒。庶幾可比我梅溪歟。日已斂昏、花隱淡烟、

中千樹依約不見其所極暗香蕪勃襲人聞溪聲益近且大至
咫尺不辨色而後去

二

昏黑還入院欲送月升復出觀花也余平生想梅溪月夜之奇
欲一游併之每歲春有人自伊來者輒詢之花之開謝與月之
虧盈每齟齬不相合遲之七八年至於今歲欲以今月望前來
然以地在中著花殊晚其盛開常在春分前數日而春分在
今月之末如其無月何忽思邵康節詩云賞花慎勿至離披私
謂及半開則可何待其爛漫遂以望後三日來豈意花開已七
八分或將十分實望外之喜也獨奈日已落黑雲覆天意殊悵
悵張燭欲飲此行購樽容五升者滿貯酒命奴負荷呼取之酌
不數巡而竭怪詰之乃知奴醉墜地致傾覆益悵悵買村酒得

數升來洗盞更酌雖甜不適口亦自醺然文稼風流士公圖以
詩名海內而半香善畫山水餘人亦皆吟咏揮灑少慰愁悶俄
而小溪來報曰雲破月出矣衆驚喜欲狂捨盞走出時將三更
月色清朗步抵真福寺枝枝帶月玲瓏透徹影盡橫斜寶鈿玉
釵錯落滿地水流其下鏘然有聲覺非人境傍岸西行前望月
瀨水清如寒玉漾月影覺作銀鱗而兩山之花倒蘸其上隱約
可見一棹中流山水俱動吾平生之願至是酬矣

(齋藤拙堂)

昭和十六年六月廿五日印刷
昭和十六年六月三十日發行

版權
所有

三重婦女讀本

三重婦女讀本

定價 金八拾錢
送料金拾八錢

編者 三重縣教育會

發行者 別所信一

印刷者 市岡岱

印刷所 名古屋市中區南久屋町三丁目
名古屋印刷株式會社

發賣所 三重中教株式會社
津市下部田三〇



終

